

大垣祭 祭りの担い手と再生について

A Study of Management and Revival in the Ogaki Festival

南本有紀¹

Yuki Minamimoto¹

¹岐阜県博物館

要 旨

岐阜県大垣市で5月中旬に挙行される大垣祭について、3ヶ年のフィールドワークをもとに祭礼の概要をまとめた。祭礼の次第と行事、その運営について概説し、とくに戦災で焼失した曳山の再建について詳述した。これらの記述は、筆者が実際に取材した本町・船町・伝馬町・岐阜町・宮町での聞き取りによる具体的な事例を通じて、祭礼の運営とヤマや囃子の復興について紹介するものである。

大垣祭はもと10ヶ町が運営にあっていたが、現在は、市に事務局を置く運営委員会が設置されている。また、大垣祭ではアジア太平洋戦争末期の大垣空襲で全13両のうち7両を焼失し、現在までにそのすべてを再建している。運営および再建にあたって市の果たす役割は大きい。その他、ヤマ再建・囃子復興における外部者の存在を指摘し、祭礼における変遷の諸相を示した。

はじめに

東海地方は曳山¹祭礼の宝庫といわれ、中でも、名古屋を中心とするこのエリアでは人形カラクリを搭載したカラクリ山車が突出している。岐阜県では、日本三大祭り²のひとつといわれる飛騨の高山祭やともに国指定重要無形民俗文化財に指定されている古川祭が全国的に有名だが、県内における曳山の分布はむしろ美濃地域、とくに西濃・中濃に多い(表1より50件³中、岐阜10、西濃12、中濃16、東濃8、飛騨4件)。祭礼は、春秋の2シーズンに挙行されることが多く、中でも4~5月に集中的に行われている。西濃地域では、山車は春の訪れを感じさせる風物詩となっている。

ここで紹介する大垣祭は、春になると、毎週のように催される祭りのほぼ最後を飾り、ために春の終わりと初夏の到来を告げるといわれる、西濃を代表する曳山祭礼のひとつである。「大垣まつり実行委員会」発行の平成25年(2013)の観光チラシには、つぎのように紹介されている。

城下町大垣に初夏の訪れを告げる大垣まつり。大垣まつりは、360年余の伝統を誇り、13両のヤマが城下町を巡行し、華麗な元禄絵巻を繰り広げます。

大垣まつりのヤマの起源は、慶安元年(1648年)、大垣城下町の総氏神であった八幡宮が十万石初代藩主戸田氏鉄公により再建整備された折り、城下18郷

が喜びを御輿3社の寄付で表し、大垣10か町(本町・中町・新町・魚屋町・竹島町・俵町・船町・伝馬町・岐阜町・宮町⁴)が10両のヤマを造って曳き出したのが始まりと伝えられています。

延宝7年(1679年)、藩主戸田氏西公から、神楽ヤマ・大黒ヤマ・恵比須ヤマのいわゆる三両ヤマを賜り、それを機に10か町は、ヤマの飾り付けに趣向を凝らしていきました。しかし、濃尾震災や戦火によって多くのヤマを失います。その後、修復や復元、購入などによりヤマの再建が進められ、昨年(筆者注:2012年)、全13両のヤマが勢ぞろいしました。(以下略)

江戸初期、藩主による氏神再建とヤマの下賜を端緒とする祭礼の起源を説明、祭礼に参加する10ヶ町を紹介し、それらのヤマの変遷が要領よくまとめられている。ここで触れられているように、大垣祭のヤマは震災や戦災で何度も焼失しており、そのたびに再建が繰り返されてきた歴史を持つ。平成に入ってから、数十年ぶりに復興されるヤマが続出し、ついに70年ぶりに全てのヤマが勢ぞろいするに至った。これは、観光振興と文化財指定を目指す行政の主導で、文化財保護と調査(大垣祭総合調査⁵(以下、「総合調査」という))、それに付随するヤマの整備が進んだ成果で、現在、ヤマに対する10ヶ町のひとびとの思いはたいへん篤い。

私事ながら、市教育委員会による総合調査の一端に参加

表 1. 岐阜県における曳山祭礼

地区	祭礼	無形文化財	開催日	場所	曳山(台)	有形文化財	備考
岐阜	美江寺まつり (お蚕まつり、けんかまつり)		3月第1日	岐阜市美江寺町美江寺観音	1		2011年～休止
岐阜	お蚕祭り		3月第1日	瑞穂市美江寺美江寺観音	1		
岐阜	かいこまつり		3月第2日	本巣郡北方町	1		大正期祭礼を1989年復活
岐阜	岐阜まつり		4月第1土日	岐阜市伊奈波神社・金神社・榎森神社	4	市	
中濃	諏訪神社の祭礼		4月第1土日	美濃加茂市下米田町諏訪神社	2		だんじり
中濃	御嵩薬師祭礼	県	4月第1日	可児郡御嵩町御嵩願興寺	1		大山(置き山)あり
中濃	美濃まつり		4月第2土日	美濃市八幡神社	6	県	
中濃	ひんこ祭	国	4月第2土日	美濃市大矢田神社	2		大山(山斜面)あり
中濃	太郎古天神社祭礼		4月第2土日	加茂郡川辺町中川辺太郎古天神社	2		
中濃	八百津だんじり祭り		4月第2土日	加茂郡八百津町大船神社	3	町	
岐阜	笠松まつり		4月第2日	羽島郡笠松町八幡神社・産霊神社	1		
岐阜	柿野祭り		4月第2日	山県市柿野垣野神社・清瀨神社	1	市	
中濃	佐長田神社例祭		4月第2日	加茂郡白川町切井佐長田神社	2		
飛騨	春の高山祭(山王祭)	国	4月14・15日	高山市日枝神社	12	国	屋台
中濃	久々利八幡神社大祭	市	4月15日直近の日	可児市久々利久々利八幡神社	2		
中濃	佐久良太神社祭礼		4月第3土日	加茂郡白川町黒川佐久良太神社	1		
飛騨	古川祭	国	4月19・20日	飛騨市古川町気多若宮神社	9	県	屋台
中濃	関まつり		4月第3土日	関市春日神社	2	県	
中濃	阿夫志奈神社祭り		4月第3土日	加茂郡川辺町上川辺阿夫志奈神社	1		
中濃	久田見まつり	県	4月第3土日	加茂郡八百津町久田見神明神社・白鬚神社	6	県	
東濃	熊野神社大祭		4月第3土日	恵那市上矢作町熊野神社	1		
東濃	常盤神社例大祭		4月第3土日	中津川市高山常盤神社	1		
中濃	白鳥春まつり		5月4日	郡上郡白鳥町白鳥	—		神輿・山車コンクール
岐阜	竹鼻まつり		5月2・3日	羽島市八劔神社	13	県	
西濃	垂井曳ヤマ祭り		5月2・3・4日	垂井町八重垣神社	3	県	
西濃	揖斐祭り		5月4・5日	揖斐郡揖斐川町三輪神社	5	県	
飛騨	東山白山神社祭礼		5月5日	高山市東山白山神社・飛騨総社	2	県	
西濃	南宮大社例大祭	国	5月6日	垂井町南宮大社	—		大山(置き山)あり
西濃	大垣まつり	市	5月15日直近土日	大垣市八幡神社	13	県(9)	
西濃	高田祭		5月第3土日	養老郡養老町高田愛宕神社	3	県	他1台1974年～休止
東濃	細久手ちょうちん祭り		7月第4土	瑞浪市日吉町細久手津島神社	1		
中濃	石原の提灯まつり		7月中旬	可児市西稚子建速神社	1		
岐阜	長屋神社祭礼行事 (馬駆け祭り)	県	8月1・2日	本巣市長屋神社	1		
岐阜	八朔稲荷川祭り		8月下旬の土	山県市中洞八朔稲荷	1		
西濃	下東野の市山からくり花火	県	9月16日	揖斐郡池田町下東野神明神社	1		
東濃	水無神社例祭		9月23日	中津川市加子母水無神社	2	市	
東濃	五社巡祭		9月下旬の土日	中津川市付知町大山神社・倉屋神社・水無神社	4		屋台、うち1台輪番曳行
西濃	八幡神社祭礼		10月1日	大垣市一之瀬八幡神社	1		
西濃	室原祭		10月第1土日	養老郡養老町室原熊野神社	3	県	
東濃	大湫宿秋祭		10月第1日	瑞浪市大湫町神明神社・白山神社	1		
飛騨	秋の高山祭(八幡祭)	国	10月9・10日	高山市桜山八幡宮	11	国	屋台
東濃	白山神社大祭		10月第2土日	中津川市下野白山神社	1		
西濃	久瀬川まつり		10月第2土日	大垣市久瀬川町久瀬川神社	1		
西濃	綾野まつり		10月第2土	大垣市綾野町白髭神社	5	県	
中濃	戸隠神社例祭 (九頭宮祭、九頭祭)		10月第2日	郡上市和良町宮地・上沢戸隠神社	2		
西濃	今尾神社例祭		10月第2月	海津市平田町今尾神社	1	市	
西濃	杉生神社祭り		10月連休の土日	海津市南濃町太田地区杉生神社	2		
東濃	八王子神社大祭		10月連休の日	恵那市明智町八王子神社	1		屋台
中濃	兼山秋まつり(貴船神社例祭)		10月第3日	可児市貴船神社	1	市	
岐阜	加納天神まつり		10月第4土日	岐阜市加納天神町加納天満宮	1	市	他8台を戦災で焼失 2003年～曳き直し復活

※日本の曳山祭(http://www.sit-tokyo.net/hikiyama/chubu/gifu_01.html)他より作成、ただし名称等は自治体・観光協会等HPIによる

する機会を得て、町内のひとびとのヤマへの愛情を間近に見聞した。調査期間中、新造ヤマのラッシュと重なり、大垣祭の歴史におけるひとつの画期を目撃したと感じている。現在編集途上の調査報告書では、紙幅の関係で触れえなかった知見も多い。また、研究史をたどる中で、昭和半ばの記録(和田唯男, 1975 など)と現行にままだ相違が見られ、平成になってからも祭礼日の変更される(大垣市教育委員会, 1995 など)等々、祭礼が変化し続けてきたようすが窺われた。現時点のドキュメンテーションはそれなりに有意義だろうとも考え、ここに自分の観察した大垣祭の現状⁶を記しておきたいと思った次第である。

1. 祭礼の概要

1) 大垣市の概要 最初に祭礼が举行される大垣市について概説する。

大垣市は濃尾平野北西部、岐阜県の西の玄関口に位置する県下第2の人口(約160万人)を擁する地方都市である。JRのほか樽見鉄道・養老鉄道・西濃鉄道(貨物専業)が走り、名神高速道路・東海環状自動車道が通る交通の要衝で、大学や各種学校も多く所在している。豊富な地下水を擁する「水の都」と異名され、かつてその資源を用いた繊維業が盛んだった。

歴史を振り返れば、江戸時代には、寛永12年(1635)、戸田氏が10万石で領して以来、廃藩置県(1871)まで大垣藩が存続した。小藩が林立し、藩主の頻繁な交代があっ

た美濃においては、例外的に長期安定的な政権が置かれた地域である。そのため、文化が隆盛した。祭礼もその一環といえる。

2) **大垣祭の概要** 大垣祭は毎年5月15日直近の土日に開催される、八幡神社の例祭である。初日を「試楽(しがく?)」、2日目を「本楽」といい、この2日間にわたり、10ヶ町の13両⁸⁾のヤマが曳き回される。この13両のうち3両は、持ち回りで奉曳されるヤマである。2日とも午前中は八幡神社と市役所で囃子やカラクリ、日本舞踊が披露され、本楽午後は全部のヤマが連なつての市内巡行があり、2日とも夜は提灯を灯したヤマが再び八幡神社を参拝する「夜宮(よみや⁹⁾)」が行われる。本楽夜宮曳き別れの後、恵比須ヤマの当年と次年の当番町間で、ヤマの引き継ぎ式である「お頭渡し」が行われる。

表 2. 平成 25 年 (2013) 大垣祭次第

5月11日(土) 試楽		
8:45-10:00	八幡神社	神事・奉芸
10:00-12:00	市役所玄関前	掛芸
午後	(市内)	(自由行動)
19:00	八幡神社前	点灯
19:00-21:00	水門川沿い道路	夜宮
5月12日(日) 本楽		
8:45-10:00	八幡神社	奉芸
	(市内)	曳ヤマ巡行
11-15	岐阜町・愛宕神社	
12:40	本町通り	昼食
14:00	竹島町	
15:20	船町・住吉燈台	
16:00	駅通り	休憩
16:30-17:00	駅通り	大垣まつり行列
19:00	八幡神社前	点灯
18:30-19:00	八幡神社前・広場	神輿渡御
19:10-20:10	水門川沿い道路	夜宮
20:45	神社拝殿	「お頭渡し」の儀

※実行委員会主催、2013年より

※青年のつどい等主催

※恵比須ヤマのみ

※太字が主な祭礼行事
 ※<http://www.city.osakikie.jp/cmsfiles/contents/0000001/1311/ura.pdf> (大垣まつり実行委員会)より作成

祭礼の2日間は、神社周辺はもちろん、歩行者天国になるJR・養老鉄道大垣駅に面した駅通りを中心に、神社周辺に500~600ともいわれる屋台(夜店)が立ち並び、毎年20万人の出入が繰り出す、西濃地域最大規模の曳山祭礼である。

大垣祭の担い手は、現在、行政や観光関係者など多岐に拡大している(組織については後述)が、中核となるのは冒頭から頻出する「10ヶ町」の人々である。ただし、全住民が参加するわけではなく¹⁰⁾、祭礼に出役する人を「担務員」といい、名簿を整備¹¹⁾している。町内によっては「祭事委員¹²⁾」ともいう。これらのトップが各町内の総責任者で、「担務員長(祭事委員長)」という。

大垣祭の目玉は、趣向を凝らした13両のヤマである。うち10両は10ヶ町の持ちヤマ(これを「本ヤマ¹³⁾」という)で、残り3両は藩主から下賜¹⁴⁾されたヤマ(「三輦ヤマ¹⁵⁾」と総称する)である。三輦ヤマは10ヶ町を三等分して各3~4ヶ町が1年交代で奉曳¹⁶⁾している。全ヤマ各町内に曳行に付随する囃子があり、本ヤマにはカラクリヤマと芸ヤマがあつて、前者は人形カラクリを、後者は子ども

たちの日本舞踊¹⁷⁾を見どころにしている。これら芸能の披露を、神前では「奉芸」、その他は「掛芸」という。

祭りのクライマックスが本楽の曳ヤマ巡行である。10ヶ町を中心に、市中心部の2.2里(約8.8km)に及ぶコース¹⁸⁾(図1)を全ヤマが連なつて曳行する。ヤマの順序は、江戸時代は固定していたが、明治以降、交代制になり、現在は到着順である(詳しくは章末の年表参照)。ただし、神楽ヤマは必ず先頭を務める。この通り道となる10ヶ町では、門幕¹⁹⁾を張り、ご神灯を灯してヤマを迎え、町並みが祭りの情景に変わる。この巡行路は東回りと西回りを1年交代で実施している。また、ヤマが提灯で飾られる夜宮では、ほとんどの町内が鳥居前の広場でヤマを豪快に回転させ、ここも見どころである。

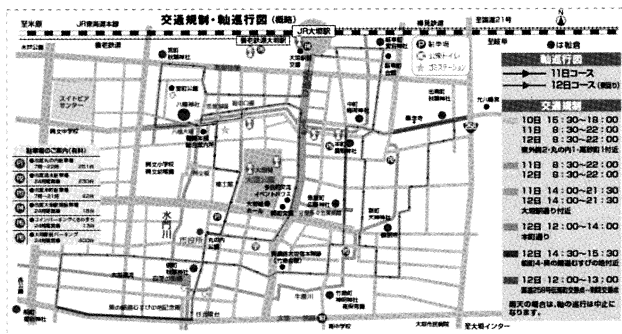


図 1. 地図(大垣まつり実行委員会作成)

観光客が見学できる祭礼の主な行事次第は表2のとおりだが、試楽の前々日・前日にも「先触れ(前触れ)」といて、三輦ヤマのみが曳き出される²⁰⁾。これは祭りの開催を市内に知らせてまわり、前景気を煽る意味がある。また、これに先立つ祭礼準備の一環でヤマを飾り付けた(懸装品やカラクリ人形を装着・設置する)日に、「町内渡し」と称して主に自町内を曳行する。町内渡し・先触れ・試楽午後の自由行動時における曳行の実施やコース等は各町内の裁量で決められ、このとき「祝儀集め」をする。これがヤマ運営の大きな資金源になる。「大垣市総鎮守」²¹⁾とされる八幡神社は、ヤマを奉曳する10ヶ町はもちろん、旧市域中心地が全て氏子圏である。そのため、大垣祭は「大垣市域全体の祭礼」と認識されていて、各町内は、自町内はもちろん、できるだけ広い範囲を曳き回す。(そして、祝儀を集める。)

ところで、藩政時代には、先頭の神楽ヤマが紅葉橋²²⁾を渡り、神前で奉芸を始めると江戸詰の藩主へ本楽式挙行を知らせる飛脚が江戸へ差し向けられた(和田唯男, 1975)り、藩主上覧²³⁾に際しては、先頭の神楽山が大垣城内に一歩でも踏み入れば、途中で雨が降っても祭礼が続行され、ヤマを曳かねばならなかった(山田美春, 1976; 和田唯男, 1968)といわれるほど厳粛かつ格式の高い祭礼であった。

対して、現在の大垣祭は、多くの観光客を集め、行政・観光協会の積極的な関与、というよりも主体的な運営による市民祭（金賢貞, 2006）といえる性格の祭礼である。

次章では、筆者が実際に調査にあたった恵比須ヤマと本町・相生ヤマを中心に、祭礼の現状を紹介する。なお、調査に当たったのは、平成 23 年（2011）は宮町・恵比須ヤマと本町・相生ヤマ、24 年（2012）は岐阜町・恵比須ヤマ、25 年（2013）は船町・恵比須ヤマであった。以下の記述はその折の観察および聞き書きをもとにしている。

2. 祭礼の実際

この章では、最初に筆者の主な調査対象であった恵比須ヤマと相生ヤマについて、また、大垣まつりの運営組織について概説した後、現場での見聞を簡単にまとめる。ここでは、祭礼の概要は既述に譲り、前章に書き洩らしたことを中心に取り上げている。

1) 恵比須ヤマと相生ヤマ

a. 恵比須ヤマ

藩主から下賜された三輦ヤマのひとつ恵比須ヤマは、4ヶ町が一年交代で奉曳し、調査時は宮町（2011）・岐阜町（2012）・船町（2013）・伝馬町（2014）が当番町であった。三輦ヤマの当番になった年は、本ヤマの前を曳行させる。

鯛を左脇に抱えた恵比須の置人形を乗せた単層の鉾台型山車で、カラクリはない。三輦ヤマはいずれもそうだが、本ヤマよりかなり小型軽量である。人形は、竹籠を組み合わせた本体に中空になった木製頭部をはめ込んである。この頭部を「お頭」（写真 1）と他と別にして神聖視し、保管時は他と別にして、曳行のときのみ装着する。その際は、不浄な息がかからないように懐紙²⁴を咥え、素手では触らない。恵比須と大黒のお頭は左甚五郎の作と伝わっており、塗装を塗り替えようとして触れると、恵比須は火を吐き、大黒は水を吐いたので、恵比須のみ修復できなかった²⁵という伝承がある。



写真 1. 恵比須ヤマのお頭（宮町）

お頭は本楽の夜宮終了後、八幡神社拜殿で「お頭渡し」という引き継ぎ式を行い、当年から次年の当番町内へ受け渡される。このときヤマごと引き継がれる。この行事は、三輦ヤマの中でも恵比須ヤマだけで行われている。

恵比須ヤマには例外が多く、雨天でも、このヤマだけは蓑笠を着せて曳き出した。これを「濡れヤマ」と称し、その年は雨が多いという（岐阜日日新聞夕刊 1979 年 7 月 4 日）。「祭礼が雨に降られると恵比須様が鼻を垂らす」「恵比須が鼻を垂らすと雨が多い」といったのは、恵比須の鼻先から滴り落ちる雨だれを表したもののようである。蓑笠は現存しないが、現在でも、ビニールシート製の「合羽²⁶」をつけて曳行する（写真 2）。船町が当番の年は雨が、伝馬町・岐阜町の当番年は晴れが多いといった（西宮神社講務課, 2006）。因みに船町が当番だった平成 25 年（2013）の先触れ 2 日間と試楽は雨で、試楽の行事は全て中止されたが、恵比須ヤマと神楽ヤマ、船町・玉の井ヤマ、伝馬町・松竹ヤマのみ曳き回された。後半の 2 両は子どもの芸ヤマである。



写真 2. 雨天を行く恵比須ヤマ（船町）

恵比須ヤマにつくのは青年層が主となる。三輦ヤマの衣装は、浴衣に角帯で、恵比須ヤマの場合、肩に編み笠を、腰に竹籠（魚籠か）を下げたという（岐阜日日新聞夕刊 1979 年 7 月 4 日）が、現在、編み笠を背負う人が若干見られるものの、竹籠を下げる人はいない。一方、本ヤマにつくときは紋付羽織袴を着用する。ヤマの担当は概ね年齢と役職によって割り振られるが、両方のヤマにつかねばならない場合、丁寧な人はつくヤマによって着替えた。担務員長などの役付きの中には、浴衣に羽織袴という折衷型の人もいる。

30 年ほど前までは、子どもたちが、2 本の綱で曳いて歩いたりした。現在も、ヤマに乗せてもらったり、ヤマについて歩く子どもたちが少くない。子どもが多かった昭和半ばには、希望者が多くて乗り切らないので、「松」「竹」「梅」（船町²⁷）や「恵」「比」「須」（伝馬町²⁸）の札を配って交代でヤマに入れていた。子どもが少なくなり、現在

は行われぬ。また、交通事情のため曳き綱も廃止されている。



写真 3. 相生ヤマ (2013)

b. 相生ヤマ

相生ヤマは、宝暦元年 (1751) に定められた巡行順 (本町・中町・新町・魚屋町・竹島町・俵町・船町・伝馬町・岐阜町・宮町) において長らく先頭に立ってきた。それにふさわしく、全ヤマ中最大規模の重厚なヤマで、謡曲「高砂」をテーマにしたカラクリが名称の由来になっている。能囃子に合わせ、住吉名神 (本ヤマ人形) が袖がえしや面かぶりの仕掛けを交えて舞うと、小謡を伴奏に神主友成 (前ヤマ人形) が前方に進み出て、瞬時に帆掛け船に変身するカラクリである。

このヤマは戦災で焼失したため、本町の巡行参加は神楽ヤマ当番年のみであった。平成になってから再建および装飾の追加が行われ、祭礼参加 18 年目となった平成 25 年 (2013) には曳行もすっかり様になっている。この間、本町の人々はヤマに対する実際的な知識を蓄えてきた。再建については章を改めて詳述する。



写真 4. 加飾前の白木の相生ヤマ (2011)

2) 運営組織と役

a. 大垣まつり

現在の大垣祭は大垣祭出ヤマ運営委員会 (委員長²⁹は大垣市長) (以下、「運営委員会」) が運営³⁰し、「大垣まつり³¹事業計画」に基づいて実施されている。運営委員会は事務局を市商工観光課³²に置き、10ヶ町のほか、大垣警察

署長³³などから構成されている。ヤマを出すか否か、申し合わせ事項 (ヤマ曳行のルール) 等が決議される大垣祭の最高機関である。この機関で、10ヶ町は、交通係 (巡行路³⁴の下見, 歩行者天国の打ち合わせ等)・式典係 (奉芸, 夜宮の雑踏警備³⁵等)・賄係 (初寄, 反省会³⁶の手配等)・総務係 (会計等) を分担する。これは輪番で割り振られる。

大垣まつり実行委員会 (委員長は市観光協会長, 事務局は市観光協会) (以下、「実行委員会」) は、大垣祭に関連して実施される諸事業³⁷を含めた大垣まつり全体を主催している。これらに平成 25 年 (2013) より大垣まつり行列が加わった (記者発表資料「平成 25 年大垣まつりの開催について」)。

他に、市重要無形民俗文化財指定 (2007) に際して結成された大垣まつり保存会 (会長は大垣祭出ヤマ運営委員会委員長代行) があり、ヤマの修復や再建事業を行っている。

b. 町内の組織

各町内には、担務員³⁸で構成される祭礼運営組織がある。自治会と別に組織されているが、運営する構成員は重なっているところが多い。本町・出ヤマ育成委員会 (以下、「育成会」) を例にすると、表 3 のような役職がある。

表 3. 本町・出ヤマ育成委員会諸職 (2013)

役	役割
担務員長	育成会会長で、総責任者
幹事長	実務責任者
答礼役	自治会長、担務員長経験者 本業巡行時に本町を通る他町内の挨拶を受ける係
審合所詰役	お神酒をふるまう係
進行役	神楽／相生 コースの決定など、ヤマ曳行を受け持つ係
会計係	正／副 会計を担当
総務係	正／副 総務を担当
(警護役*2)	(組合町*3でつくる神楽会の役 当番年以外の年に神楽ヤマにつく係)
種古係	正／副 囃子・人形操作・謡曲の種古を担当
祝儀係	神楽／相生 祝儀集めの係、お返し準備・もらった先の記録など
交通係	神楽／相生 交通整理、安全確認をする係
雑踏警備係	夜宮奉芸時の安全管理をする係
管理係	正／副 備品管理の係、装飾品の装着・提灯の点灯確認など
賄い係	正／副 種古から後寮まで関係者全員の飲食を手配する係
子供係	正／副 種古から祭礼当日まで子どもの世話係
記録係*4	記録係 祭礼を記録する係
謡曲方	師範*5 相生ヤマのカラクリで「高砂」を謡う係
囃子方	笛 師範 両ヤマの囃子を演奏する係 太鼓 師範 同上
人形方	神楽 師範 神楽ヤマの操り人形を操作する係 神楽／相生 正／副 相生ヤマのカラクリ人形を操作する係 棒頭 相生 ヤマを動かす係(手古)の責任者 ヤマの前方につく
手古係	二番棒 神楽 棒頭のサポート役 ヤマの後方につく 四隅 手古の指揮監督係 ヤマの前後左右につく 手古 朝日大学(瑞穂市)*6ラグビー部(学生アルバイト)

*1 2013年は神楽ヤマ当番
*2 神楽ヤマ当番のため設置なし
*3 神楽ヤマを輪番で奉芸する町内(本町・中町・新町)を組合町という
*4 再建中(2011-13年)のため設置
*5 町内で認められたベテラン
*6 宮町は岐阜経済大学(大垣市)で募集

大別すると、運営に関わる役と芸能に関する役があり、賄→総務→会計→幹事長→会長が育成会における出世コースである。このように、担務員数が多い本町ではとくに役職分担が進んでいる。世帯数の少ない町内の場合、主だ

った責任者だけ決めて、後は総動員になる。しかし、人数的に恵まれている本町でも、68人の担務員（育成会員）のうち実働44人で役職延べ人数87人（2013）なので、実際に出役する人は65%に過ぎず、この人たちはほぼ二役を兼ねていることになる。また、船町では青年部中心の恵比須会（恵比須運営委員会³⁹）とその他の玉の井会に分かれて恵比須ヤマと本ヤマ（玉の井ヤマ）を曳行している。

他に、恵比須ヤマの組合町⁴⁰による恵比須会（恵比須ヤマ組合）、10ヶ町青年部⁴¹がある。恵比須会は4ヶ町の担務員長・自治会長・若手らが集まって、恵比須ヤマの管理を協議する場で、ヤマおよび共有備品の修理改修や申し送り事項の確認、会計などが行われる。

ところで、表中、町外の人が含まれている。手古係である⁴²。棒頭⁴³以下、四隅・手古は、よそ⁴⁴から呼ばれるのが普通である。これは昭和60年（1985）頃までであった助郷の仕組みによるもので、本町の場合、安八郡外洲村（現大垣市）の町役が棒頭になって手古を集めた（浅野準一郎、2011）。相生ヤマ再建後は、市広報で志願者を募り、その後経験を積んで、現在、他町の手古同様、巧みにヤマを曳いている。

本町にかかわらず、棒頭は毎年決まった人に依頼し、手古らを引き連れて来てもらう。棒頭や二番棒だけ頼んで、手古は別にアルバイトを頼む町内もある。棒頭を務めるには経験と技術に加え、ヤマのしきたり⁴⁵についての知識が必要だし、三輦ヤマの当番年には2両を曳行しなければならないので、棒頭とその代役ができる二番棒の、最低2人は玄人が必要になる。この2人がしっかりしていれば、手古は素人の学生アルバイトでも曳行に支障ない。

また、手古はヤマを曳くだけでなく、ヤマ飾りや夜宮の準備（提灯つけなど）等、ヤマに関わる全てを担当する。助郷の名残で、町内の人手を出さないのが本来であるが、現在はいっしょに作業することが多い。

ちなみに、大垣祭のヤマの大きな特徴として、曳山といながら、曳かずにヤマの前後を押し進める曳行方法があげられる。恵比須ヤマについては、前節で既述したとおり、子どもたちが綱で曳いたといわれており、そのようすを描いた絵（船町が祝儀お返しとして作成した色紙、お返しについては後述）や曳き綱の現物が残っている（船町、伝馬町）。しかし、子どもたちの力では、軽量とはいえヤマを前進させることは難しく、実際には、やはり手古が手古棒を押し動かしたのだろう。

3) 稽古と準備

以下、祭礼の各過程をまとめておく。

毎年3月に運営委員会の初寄（初集会）があり、このと

きから各町内の祭りの準備が本格化し、囃子やカラクリの稽古が始まる⁴⁶。稽古を通年実施している町内⁴⁷では、連夜の練習が開始される⁴⁸。こうした祭りのための練習とは別に、町内の小学校に囃子を教えに行っているところも多い（宮町、竹島町など）。

本町では、稽古初日は「稽古はじめ」といって、子どもたちのオリエンテーション⁴⁹の後、打ち合わせを兼ねた会食を行う。稽古期間の折り返しには、「中稽古」として、手古を務める学生たちを招き棒頭らが説明会を行う。手古メンバーと町内役職らとの顔合わせである。共食しながら、祭りやヤマを大切に思う町内と棒頭らの気持ちが学生らに通じるようである。学生たちは毎年メンバーが変わっても、同じクラブの先輩から話を聞けらしく、ある程度の知識を持って祭りに臨んでいるようすが窺われた。稽古最終日は「稽古あげ」でやはり会食する。

また、曳行のための準備も行われる。本楽巡行路は運営委員会が下見するが、本町では試楽の自由行動等、単独で曳行するルートも含め、独自に「道路検分」を実施する。相生ヤマはとくに大型で重いため、また、まだヤマの扱いに不慣れだった再建まもない頃、交差点でのヤマの方向転換に手間取り、他のヤマに遅れてしまった反省から事前の確認を怠らないのである。ヤマに干渉しそうな街路樹・街灯・看板・交通標識・電線（写真5）、道路のくぼみ・タイルの割れなどに注意しつつ、昼食場所やトイレの位置なども確認しながら想定コースを歩く。

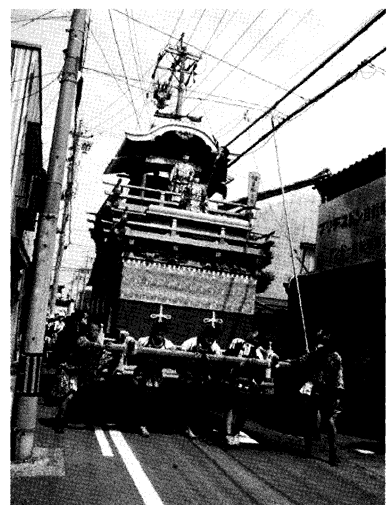


写真5. 電線をよける相生ヤマ

4) ヤマ飾りと町内渡し

大垣祭前の連休中に「ヤマ飾り」が行われる。以前は、ヤマ蔵がなかったり、小さかったりしたため、ヤマを分解して保管していたので、まず組み立てる必要があった。とくに三輦ヤマは平成10年（1998）頃まで分解保管されて

いた⁵⁰が、現在、すべての町内のヤマ蔵が三輛ヤマと本ヤマの2両をいっしょに格納できる⁵¹ため、ヤマ飾りは清掃と懸装品や人形を設置する作業が主になる。そして、ヤマの勾欄に結わえつけられた八幡神社の札を新しいものと取り換える。これは、運営委員会が一括で祈祷したものである。

このとき、夜宮のために、提灯枠（提灯を固定する枠）にあらかじめ提灯を結びつけて準備しておく⁵²。照明と音響設備の積み込みと電気設備のチェックも行う。囃子は奉芸・掛芸ではもちろん生演奏されるが、長い曳行時には録音を使用する。

恵比須ヤマでは、1990年代まで、祭りのつど人形を組み立てて、衣装を着つけていた⁵³。現在は、人形本体を組み立てた状態で保管し、着付けのみ（宮町2011）、もしくは、組み立てて着つけた状態で保管（船町2013）している。ヤマ飾りでは、お頭を人形本体にはめて烏帽子を被せ、町内渡しに出る。これは、ヤマを曳き回し、飾り付けの終わったヤマの晴れ姿を町内にお披露目しながら、祭りの開催が近づいたことを知らせるのである。手古や囃子方にとっては予行演習になる。このときに限らず、ヤマを出すときは出発式（岐阜町では「旅立ちの神事」とハバキ（ハバキ酒）をする（神事がなくハバキだけのときもある）。ハバキは、お神酒とスルメを、ヤマに関わる全員が共食する謂いである。浄めなので、ヤマに触れる人には必ず飲んでもらうという（伝馬町）。

5) 祝儀集めと配り物

町内渡し、三輛ヤマの先触れ、試楽午後の自由行動では祝儀集めが行われる。ヤマを曳行する途上の民家や商店を回り、祝儀をもらい、「お返し（返礼、おさがり）」を手渡し、掛芸を行う。お返しは、小物に、奉謝とヤマ保全に使用する旨を記した書札を添えたもので、品物は広げた扇に乗せてやり取りされる（写真6）。お返しはタオルやエコバックなどの日用品が多いが、三輛ヤマの当番年には、船町（恵比須ヤマ）や竹島町（大黒ヤマ）ではヤマを描いた



写真 6. 祝儀集めのようす（船町）

色紙を配ることがある。船町の色紙は、30～40年前に始められた。

本町の場合、お返しは通常600包用意する。東日本大震災で祭礼自粛ムードだった平成23年（2011）には200包⁵⁴が用意された。

船町では、本ヤマの町内渡しと恵比須ヤマのみ祝儀集めを行う⁵⁵。そのため、市西部は恵比須ヤマの当番年にしか回らない。

また、奉芸・掛芸にちなんだ配り物もある。本町・相生ヤマは、人形が船に変身するカラクリの場面で、田中せんべい総本家（町内に所在、担務員）の特製煎餅を子どもたちに配る。岐阜町・愛宕ヤマは鳩が豆を拾うカラクリにちなんで三嶋豆（高山市）を、新町・菅原ヤマは文字書き人形が揮毫した書を配る。

6) 先触れ

祭り直前の2日間、先触れと称して三輛ヤマのみ曳き回される。ルートは一定せず、各町内の自由裁量で組合町を中心に10ヶ町と周辺の大垣市中心部を独自コースで曳行する。八幡神社と市役所には必ず寄り、祝儀集めの見込める駅通りの郭町商店街と養老鉄道西大垣駅周辺の企業団地も、各ヤマともに回る定番コースである。とくに恵比須ヤマの場合、恵比須が商売の神様なので、建築会社などで歓迎される。お囃子クラブ等の指導で普段から関係のある小学校に立ち寄る町内もある⁵⁶。

この先触れとそれに伴う祝儀集めは三輛ヤマだけの「特権」なので、以前は、できる限り長時間・長距離を渡した。若い世代が多かったこともあり、そのまま料理屋へ繰り出すこともあったというが、現在は、夕方にはヤマ蔵に収めてしまう。そもそも、祭礼日が土日であっても先触れは平日（木金）なので、勤め人は出てこられず、人集めに苦労する。午後の授業は免除されたという小中学校⁵⁷も、現在は休みにならないので、子どもたちも集まりにくい状況である。

祭礼日が固定されていたときには、本楽（15日）が金曜日にあたった場合、ゴールデンウィークから間もないにもかかわらず、三輛ヤマの当番年は先触れを含めて火曜日から4日間仕事を休まねばならなくなる。このため、祭礼参加の意義を鑑み、高配を乞う文書が配られこともあったという。勤め人の便宜を図った現在の祭礼日だが、自営業者は書き入れ時の土日に仕事を休まねばならない。

7) 試楽

奉芸開始は9時だが、早い町内では7時前後に神社前に到着する。本町の手古の集合時間は6時30分である。

この日の午後、三輛ヤマのみ元八幡宮を参拝する。本ヤマとは完全に別行動になる。元八幡宮はその名の通り八幡神社の遷座前の場所にある。参拝、奉芸の後、ここで氏子（藤江町2・3丁目自治会）の接待を受ける。必ず、豆腐としらす干し（いずれも白い）が饗され、町内のひとりひとりが、氏子からお神酒を受ける。お神酒は、塩をまぶした青梅をかじりながら飲むものだとわれている。

元八幡宮の面する道路は交通量が多く、ヤマを曳き込む十分なスペースがないため、時間指定で、3両のヤマがかわるがわる参拝する。元八幡には本ヤマも参拝したともいう（伝馬町）。

8) 夜宮

夜宮は試楽・本楽の奉芸と同じく、八幡神社前の水門川両岸を取り囲むように13両のヤマが連なって行われる。ヤマには手古らの手で提灯棒を取り付けられ、夜宮用の幕が見送りに掛かる。これは提灯の火が幕に着かない⁵⁸よう、夜露が幕を損なわないように付けられるカバーである。19時、一斉に提灯が灯され、夜店が立ち並ぶ中をヤマが行くようすは、祭りのハイライトともいえる。各町内の人々は馬乗り提灯を手にはヤマの前を先導し、ヤマを八幡神社に「あてる」（鳥居中心へヤマを向け前進させる、拝礼の意味）。あてて、戻し（前進させ、一旦停止、後退させ）、その後、「回す」（回転させる）。回転させない町内もある⁵⁹が、提灯で飾られたヤマがぐるぐると回転するようすは壮観で、観衆もひとときわ盛り上がる瞬間である。1日中ヤマを曳いて疲れ切っていた手古らも、張り切って力を振り絞る。三輛ヤマのような小さくて軽いヤマはクルクルと小気味よく、重いヤマはゆっくり堂々と回す。拝礼の間は町内幹部が整列して次のヤマの幹部の挨拶を受ける。

ヤマを回すことは、本町が戦後に始めたという。それ以前はロウソクを使っていたので、回転させるとヤマに火がついてしまう⁶⁰。最初、手古から回させてほしいと申し入

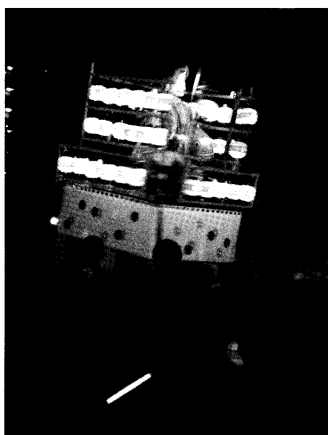


写真7. 夜宮の恵比須ヤマ（船町）

れがあったが、町内の人にはヤマの損傷を恐れて難色を示したものの、許した。観衆に受けるので、そのうちほかのヤマもやるようになったという。

また、点灯と同時に進行で、市青年のつどい協議会⁶¹による御輿渡御が行われる。ヤマの拝礼が行われるのと同じ鳥居前の広場で、若者たちが3基の御輿（八幡神社の3柱の祭神）を担ぐ。これがなかったころは、トラックの荷台に乗せた御輿が市内を走行するだけだった。

ヤマの拝礼は、見るほうもやるほうも気持ちが高揚するだけに、危険を伴うので、雑踏警備係が活躍する。提灯点灯前に各町内の係が集まり、市役所商工課（運営委員会）の仕切りで、「拝礼線」（手古棒の先端の位置を示す線）とヤマを回転させる中心点と範囲（直径13mの円形）を決め、それぞれ白線を引く（写真8）。この円内に見物客が入らないよう白線上に配置された係がガードするのである（写真7：手前の誘導棒を手にはしている人物が雑踏警備係）。



写真8. 雑踏警備の打ち合わせのようす

拝礼は、神社前の水門川沿いを各ヤマが2周して曳別れる。町内では、神灯を灯し通りに出てヤマを出迎える。本町の場合、ところどころでヤマを止めて、掛芸を披露しながら、本町通りを北上し、ヤマ蔵に帰着した。提灯棒など夜宮の装備を外し、ヤマをヤマ蔵に収め、着替えて夜食を摂り、手古らが解放されるのは23時を回るときもある。

9) 本楽

この日の市内巡行は神社先着順⁶²である（神楽ヤマのみ必ず先頭）。巡行は八幡神社を皮切りに、10ヶ町の氏神を拝礼⁶³しつつ、市内中心部に行く。途中の旧美濃路は道が狭く、曳行の難所である。

各氏神では担務員幹部が整列して待っていて、ヤマについた役員らと「〇〇ヤマにおかれましては無事の運行おめでとうございます」「〇〇町の〇〇ヤマでございます、おめでとうございます」「お気をつけて」と挨拶を交わす。このため、担務員長は巡行とは別行動になる。

この日の昼食時間は、全 13 両が本町に置きヤマする。このため、本町では貴船広場（氏神・貴船神社前）にテントを張って、飲み物のサービスをしている。

10) お頭渡し

本楽夜宮終了後、恵比須ヤマのみ八幡神社拝殿前へ進み、お頭渡しが行われる。恵比須ヤマ当番の引き継ぎ式である。これをもってお頭と恵比須ヤマの管理が次年へ移り、翌年の当番町が恵比須ヤマを曳いて町内へ戻る。



写真 9. 拝殿に安置されるお頭（岐阜町）

お頭渡しは、当年当番町の奉芸→お頭の取り外しと拝殿安置（写真 9）→神事→拝殿での謡曲（小謡「高砂」と「烏帽子折」⁶⁴）の応酬と手締め⁶⁵→お頭の受け渡し→お頭の取り付け→次年当番町の奉芸という一連の行事である。

お頭渡しが無事に終了すると、そのまま帰りヤマを奏しながら町内へ向かう。自町に戻った後は、町内を渡しつつヤマ蔵を目指し、到着後、お頭を取り外して宿（後述）へ移し、直ちに祭壇に祀られる（写真 10）。このとき宿の主人の接待がある。こうして長い一日が終わるが、伝馬町ではこの日のうちに清算までしてしまう。



写真 10. 宿に到着したお頭（伝馬町）

11) お頭の保管と祭り

お頭は、当番町のしかるべき個人⁶⁶宅（これを「宿」という）に祭壇を設けて一年間お祀りする。この間は毎朝のお供えや毎月の神事があり、随時、町内の人がお参りに来るので、家を留守にできない。負担が大きいため、現在、宿を続けているのは 4 ヶ町のうち宮町と伝馬町のみである。岐阜町は岐阜町会館、船町は氏神・愛宕神社拝殿の金庫に保管し、両町とも月例の神事はそこで行っている。

船町は毎月第 2 日曜日に祈祷がある。本ヤマ・玉の井ヤマのお頭（玉の井さん）と並べて祭壇に祀られる。

伝馬町では毎月 1 日・15 日に神事を、10 月に恵比須講を行う。

岐阜町では毎月 1 日・15 日にお頭祭りを行っている。神官を呼んで祈祷する。そのほか、11 月 20 日頃と 1 月初恵比須に恵比須講を行う。

宮町でもやはり毎月 1 日・15 日が礼拝日⁶⁷で、宮町 2 丁目自治会が主催し、班ごとの当番制になっている。12 月には全戸（全班）の恵比須講が行われ、礼拝と婦人会手作りのぼたもち配布がある。

ところで、恵比須ヤマを下賜した戸田氏は恵比須神を深く信奉し、ヤマに祀るに際して摂津（兵庫県・西宮神社）へ祈祷の遣いを出したといわれている（青山松任, 1934）。大垣祭は八幡神社（祭神は、応神天皇・神功皇后・比咩大神）の例祭だが、恵比須ヤマの組合町では、恵比須神にちなんだ独自の宗教行事を行っている。例えば、船町では、次の当番町へお頭を引き渡した後、西宮神社へ参拝し囃子を奉納しており、平成 18 年（2006）6 月、十数年の中断を経て、この習慣が復活した。同年 9 月には宮町も同社に参詣している（西宮神社講務課, 2006；西宮神社事業課広報, 2006）。伝馬町は当番を引き継いだ年内に、担務員長らが島根県・美保神社を参拝する。

また、春と秋の計 2 回⁶⁸、組合町が集まる恵比須会を当番町主催で行う。恵比須ヤマを滞りなく預かっている旨の報告と 4 ヶ町の意見取りまとめの機会である。ここで、恵比須ヤマの LED 電球取り換えが決議され（2011）、平成 25 年（2013）の祭礼では、故障したスピーカーの交換費用も協議の上、折半される予定である。

12) ヤマ下ろしと後宴

本楽の翌日以降、ヤマ下ろしを行う。懸装品や人形を外し、提灯を畳んで片づける。ヤマを掃除して、シートを被せ、ヤマ蔵に収める。作業はやはり手古らが行う。伝馬町では蔵の扉を閉めるとき小謡「老松」を唱和し、手締め⁶⁹をする。同町では、大垣祭は謡に始まり、謡に終わるといっている。

恵比須ヤマの場合、お頭渡りでヤマの引き渡しが進んでいるので、ヤマ下ろしは次年の当番町が行う。この日か後日改めて、お頭渡しの当日に恵比須ヤマに載せていた前の当番町の備品を返却し、組合町共有の備品(木箱「衣装箱」、段ボール箱「えびすさんカップ」各1、合羽用の支柱)を引き取る。神楽ヤマのように、組合町立ち合いで目録を読み上げ、確認することはしない。

その後、運営委員会の反省会、各町内で後宴と呼ばれる反省会・慰労会が持たれ、その年の祭りが終了する。

直接祭礼とは関係ないが、本町では、6月に育成会の家族を対象にした「家族感謝の会」が行われる。裏方として支えてくれる家族に、よい顔をして担務員を祭りに出してもらうための家族サービスである。着物の着付けや手配ひとつとっても、家人の協力と理解がないと祭りはうまくいかない。奥さん連中に、快く旦那さんを送り出してもらえようという心遣いであり、育成会メンバーの慰安の場となっている。伝馬町でも、夏祭りを行う。

3. 相生ヤマの再建

1) 再建の経緯

前述のとおり、本町・相生ヤマは、昭和20年(1945)7月の大垣空襲で焼失したヤマのひとつである。以来、本町では3年に一度、輪番で曳行される三輦ヤマ(神楽ヤマ)の当番年以外はヤマを曳き回すことができない状態が半世紀以上にわたった。この章では、再建の経緯と内容をまとめる。

本町では、再建は早くから目論まれ、昭和末には具体的な計画がないままヤマ蔵を整備し、将来の用材とするため京都・貴船神社(氏神の本宮)から神木を貰い受けるなどしていた(浅野準一郎, 2011)。こうして、1980年代に再建の気運が高まり、1990年代には自治会による再建運動が具体的に動き出す。平成6年(1994)に育成会とは別に相生ヤマ再建委員会(以下、「再建委員会」)が設置され、8年(1996)再建(第1期再建)、13年(2001)彫刻を加え(第2期)、24年(2012)漆塗りを施し、25年(2013)金具を取り付け(第3期)、漸く完成をみた。染織品の交換や彫刻の追加など、町内では、今後も改良の手を加えていきたい意向である。

再建委員会は、10年がかりで1千万円の基金を積み立てている(朝日新聞1994年5月12日)。育成会の年次会計の繰り越しや、個人加入保険を団体契約に切り替えて手数料を積み立てた(浅野準一郎, 2011)ほか、大口寄付を募るなど、再建は再建委員会をはじめとする町内有志の地道な努力の成果であったことはもちろんだが、平成19年(2007)、大垣祭が市無形重要民俗文化財に指定されたこ

とが大きな契機となったことも見逃せない。これによって、県有形重要民俗文化財(震災等で損壊を免れた9両)以外の再建ヤマも行政の補助対象となり、本ヤマのない各町内で再建資金確保の目処が立つようになった。以後、宮町・狸々ヤマ(2001年再建、2010年塗・金具付設)、中町・布袋ヤマ(2013年再建)、俵町・浦嶋ヤマ(同)と、本町がつけた道筋をたどる町内が続いたのである。

話を本町に戻すと、相生ヤマは神戸町の宮大工・滝脇順一、カラクリ人形は大垣市の後藤秀美(大秀)が制作した。ヤマも人形も写真しか残っていない状態から再建(新造)されており、宮大工出身で能面打ちでもある後藤⁷⁰は、前代ヤマの写真から寸法を割り出し、町内の古老から聞き取りを行って、独自の仕掛けを考案した(岐阜新聞1995年9月11日)。約70年ぶりのヤマ新造は、大工も施主である町内も手探り状態であった。結果、大きくて立派ではあるものの、重すぎて曳行には向かないヤマができあがった。他町からは「本町のヤマは本普請やで」と揶揄されたという。ヤマは家のようにがっちり建てるものではなく、曳くと、ゆらゆらと揺れ、ぎしぎしと鳴るような、組み立てやすく解体しやすい独特の構造であるべきなのだが、長らく本ヤマを失っていた本町では知られていなかったのである。このようなヤマを曳いてみて初めてわかる実際的な知識は、世代を超える伝承が難しい。本町では、白木で曳行した16年間⁷¹で、物理的なヤマのノウハウを積み重ね、塗に際しては、不要な部材を取り除いたり、塗の厚み分を削ったりしてヤマを軽量化している。

平成24年(2012)2月19日、一応の塗と金具取り付けを終えたヤマが町内に披露された。金具の工期が計画より一年延期されたため、このときは内覧という形式で、完成形は翌年4月8日の特別曳揃えで披露することになる。今後は「技術においても色彩においても先ず十か町中の尤もたるもの」(青山松任, 1934)といわれた染織品の更新を検討中である。ヤマを愛してやまない本町の人々にとって、再建はまだまだ途上といえるだろう。

2) 第3期再建について

この節では前節で概説した再建事業のうち、直近の塗と金具の付設について取り上げる。これ以前の2度にわたる再建事業を通じて得た経験をもとに、3度目のヤマ整備事業では、プロポーザル方式で業者選定が行われ、町内と工房を行き来して、双方が納得する工法を選択するなど、現実的で現代的なプロセスで再建が進められた。一方、この工期中に総合調査が行われ、施工の過程には専門家の厳しい眼が注がれた。期せずして、文化財として「あるべきヤマ」と、工法・費用・工期という実際的な制約の中での「よ

りよいヤマ」のせめぎあいが起こった。双方の許容範囲の境界が接するところで、現在の相生ヤマが具現することになったといえる。

再建、それも複数のヤマが新造されることは、360年の大垣祭史上でも珍事といえるだろうが、毎年2日間にわたり長距離を曳行するヤマにとって多少の不具合は避けられず、修理・修復はよく行われている。その手配は、彫刻は市内の仏壇店、染織品の場合は呉服商に依頼することが多い。県下有数の商業圏でもある大垣市は、かつては遊郭や料亭が所在し、現在も大垣別院（真宗大谷派大垣別院開闢寺）を擁する。このため、市内に関係の業者が少なくない。本町でも第1～2期再建事業は、市内業者、もしくは市内業者を仲介して行われたが、塗と金具は名古屋市・名古屋創作工芸によって施工された。これは、同町担務員に公立博物館学芸員がいて、この人の斡旋によるものであった。

同社は名古屋周辺で活動する職人集団で、平成22年（2010）に「次世代の名古屋を担う子ども達のための山車」として1/2サイズ模型山車「童子車」を制作した名古屋仏具研究会⁷²会員からなる。業者選定は市内2社と合わせた計3社のプロポーザル方式によったが、選定にあたり、町内の主だった何人かが、上海万博（上海国際博覧会、2010年5月1日～10月31日）に出展されていた童子車を見に行っている。本町の人たちのヤマにかける熱意と本物志向を窺わせるエピソードである。

熱意の現れとはいえ、これは、それまで市内で培われてきたヤマに関する知識がアウトソーシングされたことを意味する。現在でも、ヤマをつくる大工は市内におらず、再建ヤマはすべて近隣に依頼されている。

3) 囃子の復元と新作

名古屋創作工芸を施工業者に選んだことは、ハードのみならずソフト部分にも影響を与えた。同社の関係者によって囃子が復元・作曲されることになったのである。漆塗りの記念につくられた「道行」と「帰りヤマ」が、それである。前者は伝承があったので、それをもとに再興し、後者は、名古屋創作工芸を通じて、町内の人が敬意をこめて「祭りのプロ」と呼ぶ永田組⁷³によって、新たに作曲された。平成25年（2013）からは、それまでなかった能管と小鼓⁷⁴を使った新曲が演奏されている。

また、焼失によって振付が全く廃絶してしまっていた相生ヤマのカラクリも町内の人によって新作された。育成会の人形方が、能楽「高砂」の映像を繰り返し見て、振り付けたものである。その際、市役所（商工観光課）から演技時間を7分⁷⁵に収めてほしいと注文されている。現行は、

袖返しなど能の所作を見事に模倣しているが、町内では、どんどん変えたほうが見ているほうもやるほうも楽しみがあるといい、今後も変更がある見込みである。

4. 祭礼の変化と進化

冒頭で述べたように、筆者は、大垣祭を3ヶ年（平成23～25年）にわたって観察・記録する機会を与えられた。この間、印象に残ったのは、ヤマの再建と改修、囃子の復興・新作など、「360年の伝統」を標榜しながらも変化⁷⁶し続ける祭礼の姿だった。相生ヤマや狸々ヤマの場合、塗を施したり、一部変更したりしたので、外見が全く変化したため、観光パンフレット用写真を撮影し直さねばならないほどだった。それ以外の町内でも、廃絶していた囃子を復興したり、あるいは習得しやすいうように採譜したり（伝馬町）、目に見えない変化については枚挙にいとまがない。10ヶ町の祭礼運営（祭りの中核であり、文化財保護の対象と認識されている）以外の部分でも、祭礼本来の意義と姿を復元する意図で、ヤマが御輿を先導する大垣まつり行列が新規に加わる（2013）など、筆者が取材した数年の間だけでも年ごとに変更が加えられていった。

ここで見られた「変化」は、すなわち、「改良」なのか。そうならば、誰にとって、どういう点で「よりよくなった」のかは、さらに問われるべき問題だと思うが、とまれ、生き生きと変化／進化し続ける大垣祭について、以下、気付いた点、気になった点に関して項目を挙げて記していく。

1) 変化する祭り

a. 運営の「近代化」

360年続いた大垣祭にも、存続の危機はあった。運営組織は、意外に変遷を重ねており、現在の形に落ち着いたのは1970年代、まだ40年しか経っていない。

祭りの運営形態が現行のシステムになったのには、大きな契機となるできごとがあった。それに至る前、昭和40年（1965）頃から、手古の確保が困難かつ経費が掛かりすぎること、ヤマや手古に保険をかけられない（事故について保証がない）こと、祝儀（寄付）への負担感等々に、一部から不満が出ていた。少なくない出費が伴う曳行を毎年行いたくないという町内もあった（岐阜日日新聞1976年4月2日）。昭和51年（1971）、ついに魚屋町がヤマ巡行の近代化策（祝儀の自粛、三輦ヤマの本ヤマ焼失町内への貸出し、事故責任の明確化など10項目）を主張、10ヶ町で構成する曳ヤマ委員会に対応を迫ったのである。この委員会では、同町以外からも曳行は八幡神社への奉納のみにつき（つまり、一番の見どころである市内巡行は行わない）という市の観光路線に打撃を与えるような意見も出

た。協議の末、賠償障害保険への加入が決まったものの、結局、魚屋町・鯉ヤマが「休ヤマ」となる事態に陥った。先の委員会では、手古に頼らない曳行＝町内住民もしくはアルバイトの曳行、曳行主催者の決定などを再検討課題とした（中日新聞 1976 年 5 月 8 日、毎日新聞 1976 年 5 月 9 日）といい、実際に、竹島町・櫛ヤマが「300 年間の伝統を破り」浴衣姿の町内担務員らによって曳き回された（岐阜新聞 1976 年 5 月 9 日）。そして、これをきっかけに、それまで 10ヶ町が当番（責任町）を輪番で務める番町体制が改められ、実質的に市が祭礼を取り仕切る現在の運営委員会ができたのである。

この翌年、大黒ヤマの当番であった魚屋町は 2 両を曳き出したものの、単独行動をとり、奉芸・掛芸、市内巡行や夜宮は 2 両を除く 7 両で「変則的に」行われ（毎日新聞 1977 年 5 月 15 日）、大黒ヤマのみ時間をずらして、試楽日の午後市役所前などを巡行した（中日新聞 1977 年 5 月 15 日）。

その後、数年にわたり、同町復帰に向けた話し合いが持たれて、昭和 59 年（1984）3 月の運営委員会で魚屋町の運営委員会参加を承認、9 年ぶりに統一巡行が復活している（毎日新聞 1984 年 3 月 10 日）。運営委員会への同町加入決定を受け、当時の委員長代行は、今後は「民主的にまつりの運営を進めていく」とコメントしている（毎日新聞 1984 年 3 月 10 日）。

こうして、魚屋町不参加という事態は数年で解消されたが、これ以降、行政の主体的な祭礼統制が行われることとなった。いわば、現在の「大垣祭の「かたち」をつくった重要なターニングポイントとなるできごとであったといえる。また、現状の祭礼運営の方式は、関係者の「民主的」な協議によって「近代化」された所産である一方、1970 年代、大阪万博以降、地域振興・まちづくりを動機に、各地で増産された官制祭礼イベント⁷⁷の走りともいえる運営形態が誕生したことは、祭りをめぐる時代の雰囲気を奇妙に体現する結果ともなった。

b. 曳き手の確保と祭礼日の変更

前節において、祭礼の問題点として挙げられたのは、曳き手（手古）確保の困難であった。これは、祭礼が平日に挙行されることに起因する。この解消策として近年よく見られるのが、祭礼日を本来の期日に近い週末に移動させる方法である。大垣祭でも、平成 7 年（1995）から 5 月 15 日までの日曜日に本楽開催日を移行している。

そもそも大垣祭のヤマは、助郷に由来する近郊農村の助っ人や「昔ながらの風習を伝えて各町内に出入りしている土建業者の手古が勇ましいハッピー姿で引き回すきた

り」（岐阜日日新聞 1976 年 7 月 11 日）であって、町内と付き合いのある建築業者が手古を務めることが通例⁷⁸であった。

ところが、1990 年代になると、「農閑期の農家」を雇っていた手古のなり手がみつからず、「学生アルバイトや建築業者」に依頼するものの、それでも人手確保が難しくなり、「大垣まつり曳ヤマ十ヵ町」⁷⁹に青年会⁸⁰と研究部会を設けて解決策を検討した結果、土日開催を市に要望（岐阜新聞 1993 年 4 月 9 日）する事態に陥ったのである。

手古の問題とともに、祭礼の担い手である 10ヶ町の職業形態の変化も、祭礼日の変更を要請するようになっていた。市街地にある 10ヶ町では住民の市外流出、いわゆるドーナツ化現象が発生する一方、駅からの徒歩圏内では大型マンションの建設が進み、祭礼に関わりのない新住民も増加していた。古くから祭礼を支えてきた自営業者は、むしろ少数派になってしまった。親世代から祭礼に参加してきた人の中にもサラリーマンは多く、ほとんどの担務員にとって平日の参加が難しくなってきたのである。このため、平成 2 年（1990）の運営委員会で、5 月 14・15 日の開催日を週末に変更し、加えて、本楽の曳山巡行路を短縮して、観光名所の多い水門川周辺を巡るコースに変更することが提案されたが、このときには時期尚早として見送られている（毎日新聞 1990 年 5 月 12 日）。

平成 5 年（1993）4 月、前述の「大垣まつり曳ヤマ十ヵ町」の要望（岐阜新聞 1993 年 4 月 9 日）を受け、早くも 8 月には「大垣曳ヤマ対策市民懇話会」が市民 1,300 人を対象に郵送によるアンケートを実施し、10 月に集計結果を公表している。それによると、従来どおり 5 月 14・15 日でよいとするのが 45.6%、土日変更を支持するのが 54.4%で、意見が二分した。前者の理由として「伝統を大切に守りたいから」が 90%を占め、懇話会でも「合理性、現実性ばかりを求めるのは疑問」の意見が出る（岐阜新聞 1993 年 10 月 14 日）など、市民の根強い伝統志向を伺わせている。この懇話会は数回の協議を経て市長へ提言をまとめたようである。結果、平成 7 年（1995）の祭礼から土日開催が試験的に開催され、その後、異論が出ることもなく、こんにちに至っている。

手古の確保は、しかし、現在でも完全に解消されていない問題ではないかと思う。筆者の見聞で、印象深かった事例を紹介しておこう。

岐阜町では、手古を、ヤマ蔵を施工した建築業者と中国人の Z さんに長年依頼している。この Z さんとは、現在の棒頭より古い付き合いである。10 年前、Z さんが岐阜経済大学（大垣市）の留学生だったときに、アルバイトで参加して以来の縁だという。現在、名古屋市内で就労して

いる Z さんは、祭りの時期になると、同郷の仲間を数人引き連れてやってくる。Z さんは、「お金は（筆者注：「全然」「どうでもよい」というゼスチャー）だけど、岐阜町の皆さんに会いに来る」「里帰りみたいなもの」と語る。現役留学生もアルバイトに来るので、岐阜町の手古は中国人率が非常に高い。平成 24 年（2012）の恵比須ヤマは、手古 6 人がなんと全員中国人だった⁸¹。

岐阜町では、平成 23 年（2011）に完成した愛宕ヤマ（本ヤマ）の水引を、市内呉服店を通じて蘇州の中国工芸美術大師⁸²に制作依頼（岐阜新聞 2011 年 4 月 18 日）している。そういえば、先触れの昼食で立ち寄った食堂では注文を受けにきたおかみさんが中国人で、Z さんらにとっても異郷での思いがけない邂逅になったようだった。祭りにも、日常生活にも、外国人の姿は身近なものになりつつある。近い将来、岐阜町の事例は、特別なことではなくなるだろう。

ただ、このように祭りに助っ人が登場するのは、大垣祭だけの特殊事情ではない。囃子方や御輿の担ぎ手を近隣の村から招集する例は、他県でも見られる（中村孚美, 1971；松平誠, 1978）。北村敏（1989）は「近年の都市の祭礼を特徴づけるもののひとつに神輿愛好会の隆盛がある」として、地縁を超えて御輿渡御を仕切る愛好団体の実態を紹介しており、清水純（2012）は 1970 年代以降増加した自由参加型ボランティア・アソシエーションである神輿同好会と地元との関係を考察している。金賢貞（2006）によれば、茨城県・総社宮大祭では、市域の広がりによって新規加入した町内の獅子囃子連や児童生徒に横笛を指導する「塾」があるほか、広域に活動する「御輿愛好会」が町内に伝承者を失った若年層に祭礼に関する知識（とくに技術的な）を伝授したり、ときには自己流の担ぎ方を指導するという。前章で触れた本町における永田組⁸³の関与が髣髴とされる。関東における御輿のように、中京における曳山においても類似する状況が進行しているのかもしれない。

c. 祭り用語の変遷

大垣祭には多くの専門用語がある。10ヶ町でほぼ共通しているもの、特定町内だけで通用しているもの、現在は聞かれなくなった言葉もある。退転した「死語」には、「場均（ばならし：藩主上覧前に行われる囃子の事前発表・審査）」のように行事自体がなくなった場合がある。それ以外に、実際の祭礼の現場では耳なじみのない言葉や用例が変遷しているらしい言葉に、古い記録で出くわすことがある。

例えば、宮町で、恵比須ヤマを「はなやま」とも称すると聞いた（2011）。「はな」は「花」か「先」という意味

だという。この「はなやま」は他の町内の人に尋ねても聞いたことがない、わからないといわれるばかりだったが、和田唯男（1975）に神楽ヤマを「端山（はなやま）」とするという記述があり、先頭のヤマを意味する言葉だという。この神楽ヤマは、必ず巡行の先頭に行くことになっている。だとすると、宮町の「はなやま」は三輦ヤマに意味を拡大した用例なのか、全く、別の言葉なのか。

また、大垣市役所（1930）には「渡しヤマ」「引付け」「テコ頭」など現在では聞かれない言葉が頻出する。

こうした言葉のバリエーションは、それだけ、大垣祭が内容を変化させてきたことの現れで、多様な特殊用語は祭りの変遷の反映だろう。ここでも、「360 年の伝統」は、すなわち「不変」を意味するものではなく、フレキシブルにそのときどきの状況に対応してきた結実であり、伝統に脈動する祭りの息吹を感じさせるのである。

2) 祭りがつくりだすもの

a. 祭りの経済活動

一見、非効率で非生産的な祭礼がこんにちまで継続してきたにはさまざまな理由が想定される。この節では、大垣祭にみられる祭りの効能を考えてみたい。

ヤマにお金がかかるのは自明だが、それ以外にも祭礼には多くの経済活動が伴う。紋付羽織袴、草履などの衣装、とくに手ぬぐい（紋付・浴衣とも折り畳んで首にかける）や法被⁸⁴、三輦ヤマの浴衣⁸⁵などは、各町内が独自デザインのもを特注する。これらを町内で受注してもらうことで、ヤマ運営費用の循環（町内の自家消費）を図ることができる。この点、商店主が多い町人の祭礼を踏襲しているといえる。ただし、勤め人が増え、市外へと商圏が拡大している現在、この祭りの効用は消滅間近ではある。現に、出費の最たるものであったヤマの再建は、本町・第 3 期再建事業では多くを市外へ発注している。手間暇のかかる染織品は、人件費の安い海外へ発注され、祭礼をめぐる経済圏は国外へすら広がっているのである。

b. 季節感と祭礼の応酬

大垣祭は、よく「西濃に初夏の訪れを告げる」といわれる。これは、冒頭に掲げた祭礼一覧（表 1）に見るように、大垣祭が西濃地域の春祭りの最後を飾ることに現れている。春祭りのシリーズの最後を飾る祭礼であり、生業暦からも、大垣祭が終わるころに、農家では水田耕作が開始される時期に入る。このことが、人々の生活暦の区切りとして実感されたのだろう。

多くの曳山祭礼が観察される埼玉県の事例を分類し「曳きもの文化圏」を検討した筒井裕（2009）は、市街地が

広がる地域（同県東部＝関東平野と秩父盆地中心部）で夏季の悪疫除けのために、一方、人口密度の低い地域（秩父地方山間部）では春秋の豊作祈願のために曳山が奉納されてきたと結論づけている。春祭りである大垣祭は、明らかに城下町における都市祭礼であるが、祭礼日には周辺農村の出役が影響している。

現在は少なくなったが、以前は、祭りに招待したり、されたりという付き合いがあった。これを「呼び衆」といい、祭礼に出ずっぱりの担務員に代り、もっぱら主婦の仕事だった。この祭礼の応酬は、現在よりも婚姻圏が狭かった時代、親戚どうしの付き合いとも重なるものであった。順繰りに祭りを見物・接待しあい、土産に持たせる重箱が双方を行き来したものだという。大垣祭が春の祭りシーズンを締めくくり、この祭りの終了を待って、人々は農作業シーズンを迎え、労働モードに入ったのである。

また、船町では、試楽の日は袴の着物に縫紋、黒い鼻緒の草履に黒足袋、本楽の日には単の着物に抜紋、白い鼻緒に白足袋を着用し、羽織紐の房も替える。ここには、略正装と正装の区別と、季節感の区別がみられる。食べるものも祭りの前後で変わり、大垣祭が終われば、アイスクリームを食べてもよかったという。筍も祭りを境にして食卓に上った。こうしたことは、祭りがひとびとの暮らしに季節感をもたらし、一年の生活を区切る役目を果たしたことを如実に示している。

c. 露店屋台とクリーン作戦

この節の最後に、現代的話柄を付け加えておく。

大垣祭はとにかくたいへんな人出でにぎわう。とくに県下最大といわれる約 500 店が軒を連ねる屋台（夜店）は、壮観のひとつである。当然、飲み食いが盛んに行われるが、神社周辺はもちろん、駅通りの歩行者天国にもゴミの散乱は見られない。最大規模の屋台とゴミのない盛り場、この 2 点は、大垣市民がもっと自慢してよいのではないかとすら思わせる。

祭りを彩る屋台の中でも、ひときわ異彩を放つのが、お化け屋敷である。これは、八幡神社境内に毎年設営され、奉芸中も「楽しい、楽しいお化け屋敷」の呼び込みでたいへんににぎにぎしい。かつては見世物小屋と隔年で興行していて、大垣は見世物芸の拠点であった⁸⁶。見世物小屋はいつのまにかなくなってしまったが、お化け屋敷は健在で、いまも祭りのにぎわいに貢献している。

屋台のように、祭りを演じる、いわば表役者である 10 ヶ町以外にも、大垣祭を盛り上げる陰の存在がある。屋台が連なる喧噪に見物客はヤマ巡行以上に祭り気分を煽られる。清掃ボランティアの活躍は、大垣祭が大垣市民の祭

礼として認知され、市民の連帯感醸成に一役かっていることの現れである。

3) 祭りの進化

繰り返すが、大垣祭は多くの変遷を経て、つまり、幾多の課題を乗り越えながら変化してきた。この節では、再建を主に具体例を挙げてみていく。

a. 新技術の採用

大垣のヤマは、低い城門をくぐるために屋形（山車の上層部分）が上げ下げできるようになっている。本町・相生ヤマは最初、人力（8~10 人）で上下させていたが、平成 23 年（2011）から電動チェーン巻き上げ機を設置し、2 人の作業で済むようになった。こうした外見上目立たない技術革新は、実はいくつもあって、ヤマは、決して、「博物館行き」の「文化財」然としているわけではない。

町内の人にいわせると、ヤマというものはつくるたびに進化する。その時代々々の技術でつくるものだという。この視点と市の文化財保護策とは必ずしも一致しない。文化財的な正当性を求める市（教育委員会）と、現実的な施工を企画していた町内の再建計画はときどきに衝突しながらも、興味深いことに、外見に影響しない新技術の導入は、ほとんど問題視されることがなかった。考えてみれば、国指定重要民俗文化財である高山祭屋台でも囃子は大半が録音である。生演奏が復活したのは 2000 年代になってから⁸⁷だ。山車にスピーカーが搭載されているのは、現在では当たり前の装備ともいえよう。

もうひとつ例を挙げれば、恵比須ヤマや新造ヤマでは、LED 電球が採用されている。LED は、兵庫県・魚吹八幡神社の事例⁸⁸では、平成 15 年（2003）頃に採用されており、氏子の間で「発光ダイオードの光が青白く、温かみにかける」として使用の是非が議論されたという（筒井裕、2010）。同じ感想は、大垣祭でも聞かれた。色温度の変更は技術的には対応可能なので、白っぽく無機質な印象の照明は、そのうち、アンティークな雰囲気照明に交換され、より進化することだろう。

b. ヤマの再建（新造）

再建契機に、前代ヤマを知る人の高齢化（岐阜新聞 2011 年 1 月 6 日記事より、補助を予算化した市当局のコメント）や、10 ヶ町を含む市中心街の空洞化（世帯数減）と少子高齢化の進行（岐阜新聞 2012 年 3 月 21 日記事より、浦嶋ヤマ再建を敢行した俵町自治会長コメント）など、いまを逃したら再建が困難になるという社会的・地域状況があった。60~68 年というタイミングは、山車の耐久年数という 60 年（和田唯男、1975）とも合致している。

ヤマの再建に、祭礼知識の伝承とともに、新たな共同体の「核」の創出が期待されていることが注目される。

ひとくちに祭りといっても、囃子の稽古やヤマの準備のほか、ヤマには、保管やメンテナンスなどの普段の管理が不可欠だし、何かと手間暇・人出がかかる。それは無駄や負担のように感じられるが、反面、それに関わる子どもから高齢者まで世代を超えた交流や地縁の中心ができるということだ。学生やサラリーマンなど、現代社会に生きる私たちは、普段、年齢層などの細かな社会階層で輪切りにされている。通代的交流というのは想像以上に貴重な機会ではないだろうか。再建を決めた町内のひとびとが「ない(なかった)ヤマ」に込めた期待は文化財保護というより、もっと、現実的で、ある意味利己的である。

c. 再建とフォークロリズム

八木康幸(1998)のいうように、民俗文化の商品化(観光利用)や政治的な利用がフォークロリズム(八木の定義によると「民俗文化に対して確認、保守、修正、取捨、改変、応用、復元、模倣、捏造などの広範な反応が生じる現象」)にほかならないなら、大垣まつりの現状は多くの点で当てはまるといえる。ヤマ再建を「フェイクロア(偽物の民俗)」として非難するのではなく、フォークロリズム概念による解釈対象として射程にとらえられるべきだろう⁸⁹。お囃子の新規作曲も、飾り金具の真正性へのこだわりも、現代のヤマの担い手たちの偽らない姿勢である。

黒谷正人(2013)は、永田組の活動について、囃子を制作するだけでなく依頼者(町内の囃子方)の演奏が習熟するまで熱心に指導するようすを、「僕たちがかかわっていくことで囃子が生き返る。地元の囃子方が育ち、山車の引_マき回しもよくなり、人形も生き生きする。それが理想。子供たちにも伝承され、地域の祭りが盛大になっていくようになれば、うれしい」とのコメントとともに好意的に報じている。実際に、筆者が調査に参加した平成 23～25年(2011-13)の間、大垣祭当日はもちろん、ヤマ飾りや特別曳揃えなど、ヤマが曳き出される機会には、いつも名古屋創作工芸の責任者らの姿があり、ヤマのようすを熱心に観察し、記録していた。祭り囃子御洒落や永田組の法被を着た人が長丁場の祭礼につきっきりで演奏していたようすも目にしている。彼らの誠実さは、作曲依頼のサービスにしては過剰であるし、請負人と顧客という関係を逸脱している。祭りを復興し、隆盛に寄与したいという彼らの情熱もまた本物である。

記録や伝承のない中での囃子の「新作」やヤマの再建には、その「真偽」について、市教育委員会サイドから批判的な強制力が働くことがままあったと聞く。岩本通弥

(2003)は、「中央の権威も借りて」「共同体成員に対する義務制を帯びた強制力をも発生させる」問題性を、「ディープ保存主義(筆者注:過激な保存最優先を指す)はあくまで都市人(筆者注:この場合、中央の研究者)の眼からみた書き割りの価値づけであって、生活者からのものではない」と指摘する。祭りをめぐる研究者は、専門家として事象そのものに立脚した「正論」を述べがちである。ましてや、行政主体の調査となれば、立場上、そうならざるを得ない。しかし、民俗の再創造の場では『『本物/偽物』、過去からの連続/不連続という判断は意味をなさなくなる』(森田真也, 2003)のではないだろうか。そんな中、フォークロリズムの対象は「外向きの文化要素」(岩本通弥, 2003)であり、飾り金具は問題になっても、ヤマのメカニクな構造(例えば、ジャッキの使用)は、少なくとも調査者の知る範囲で議論にならなかった。

また、再建過程では、町内のひとびとがヤマについてのより深い理解を獲得するようすが観察された。本町の A氏はヤマ知識のエキスパートとみなされており、他町の人から市教育委員会の専門職員まで多くの人に尊敬されている。中核となって再建に取り組む中で、A氏は大垣祭についての知識をまとめ、3度の出版を行うに至った。A氏に限らず、10ヶ町には祭りとヤマに傾倒する「ヤマキチ」がたくさんいる。彼らはよく勉強していて、口承のみならず書籍や新聞記事など、広範な資料を蓄えている。調査がそれに研究者からの知識を加えた。テキストや郷土史家や学者から口承で得た知識が、インフォーマントの語りに反映するようすを検証した原知章(2000)は、「学者の営為やその産物は学問文化(筆者注:原の造語で、学術雑誌や学術書などを媒介として形成される文化の領域)のなかで完結するものではなく、伝統文化の形成に学者が関与することはままあるし、「あらかじめ調査地の人びとを読者として想定しつつ論文や著書を書きすすめていく必要がある」と論じている。

こうして、総合調査を通じて、10ヶ町の人たちはヤマについての諸々を説明するのに慣れて、受け答えが洗練されていった。町内の人々のはもろもろの部外者からの視線によって、自分たちの祭りの存在を意識させられ、ある意味、調査対象として余儀なくされた知識の整理を通じて、自らのうちに大垣祭の存在感を増していると思われる。総合調査が今後の大垣祭にどう反映されていくのか、注意深く見つけていきたい。

d. 大垣市の文化政策と大垣祭

この章の最後に、大垣祭と大垣市の関係について触れておく。

大垣市は松尾芭蕉（大垣は奥の細道むすびの地である）に因む文化観光整備を進めており、歴史的建造物の景観遺産指定、大垣祭伝承育成事業など文化の掘り起しと継承活用への取り組みが評価され、文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）を県内初受賞した（中日新聞 2013 年 4 月 24 日）。文化芸術活動による地域振興で成果を挙げたとして、「歴史文化の発掘顕彰は地域活性化の原動力」とする市長のリーダーシップによる地域づくりが外部から評価されたわけだ。

前述のように、大垣祭と市、とりわけ観光政策とは関わりが深い。再建によって全 13 両が 70 年ぶりに勢ぞろいしたのが、市が重点的に整備した奥の細道むすびの地記念館のオープニングイベントにおける特別曳揃えであったことは、そのことを象徴している。もともと番町制であった祭りは、現在、市（商工観光課）の取り捌きなくしてスムーズな進行がままならない体制である。

ここに総合調査（市教育委員会）が入り、10ヶ町にはちょっとした混乱が生じた。運営委員会で昭和51年(1976)からの付き合いがある市商工観光課と調査の事務局である市教育委員会との混同である。市民から見れば、どちらも同じ組織（市役所）である。町内の人が口にする「市が云々」の「市」がどちらを指すのか、ときに曖昧な印象を受けたのも無理はない。しかし、縦割り行政と批判されるように、行政サイドでは、課が違えば、全く話が通じないことは珍しくない。加えて、市長部局と市教委ではスムーズな情報共有が難しいことは想像に難くない。観光振興のために再建を急がせ、ときに煽動する前者と、文化財としてのオーセンシティにこだわる後者では再建に対する立場や意見が異なるのは当たり前だが、10ヶ町の人にとってみれば、「市」のスタンスのゆらぎと感じられる。これもまた当然である。

いずれにせよ、大垣祭の行く末は、今度も、市の文化行政に大きく影響される⁹⁰ことを免れえないだろう。

5. 大垣祭の特徴

最後に、大垣祭の特徴を挙げて、小文を閉じたいと思う。この大イベントの観察を通じて、筆者が注目した項目である。

1) 三輻ヤマの効能

大垣祭の特徴の第一に三輻ヤマが挙げられる。この 3 両はどの町でも青年層が運営にあたっており、本ヤマを曳行するときの予行演習的な役割を果たしている。また、本ヤマが焼失した町内でも、3 年（神楽ヤマ・大黒ヤマ）もしくは 4 年（恵比須ヤマ）に一度はヤマを曳行する機会を得ることになり、三輻ヤマの存在は、祭礼知識の伝承に寄

与したことと思われる。焼失ヤマの場合、付随する囃子も廃絶してしまうことが多いが、三輻ヤマの囃子は全ての町内で退転することなく伝わっていることがそのことを端的に表している。ヤマは町内の心のよりどころであり、ヤマを失った町内にとっては三輻ヤマがそれを引き受けてきたといえるだろう。

実際、本町の再建で中心的な役割を果たした元幹部は、三輻ヤマと組合町（中町・新町）の付き合いがなかったら本ヤマ復活はなかったと述懐する。その点でも実物が現存する意味は大きく、三輻ヤマの場合、藩主から下賜されたという権威と複数町内で共同管理するという責任分担のため、何らかの原因で破欠損しても、早期に復興される条件が整っていた。

付け加えると、焼失ヤマの再建（それも度重なる）も大垣祭の顕著な特色で、三輻ヤマの存在が喚起すればこそだろう。

2) 神事と曳山巡行の分離

大垣祭は八幡神社の例祭なので、本来の祭礼の中核は神事で、本来的には、ヤマよりも神輿が注目されるべきである。しかし、神事は観衆を集めることなく静かに挙行され、神輿はトラックの荷台に乗って法定速度で走り抜けていく。「奉芸」とはいつても、鳥居の前で（境内に入ることなく）奉納される囃子やカラクリを神主は目にしない。むしろ、市長や市議会議員がそろった観覧席を設けた市役所での掛芸こそが、晴れある舞台然として見える。

かつて「神事これなくとも山鉾渡したし」と訴えた祇園祭の町衆（川嶋将生, 2010）が象徴するように、曳山巡行と神事の分離は都市祭礼の特徴のひとつである。大垣祭ではとくにそれが突出していると感じる。それとは対照的に、町内には、神事（的なもの）を重視する風潮もある。ヤマを出すときは必ず神事（出発式）をせよといわれるし、浄めのハバキ（お神酒）は必須である。お頭の祈祷は、集客目的でなく、真摯に行われている。しかし、どれも八幡神社の祭神とはよそごとだ。本来、神賑として風流であったヤマそのものが、「神的存在」として、祭りの意味づけをも担うようにシフトしてきた⁹¹のである。

おわりに

大垣祭にはたくさんのファンがいる。ヤマ飾りや町内渡しなど、必ずしも広報されていない行事にも、町内以外の見物人が立会する。本町の棒頭には熱烈な子どもファンがいて、一挙手一投足をまねしながらヤマについてくる。いや、それ以前に、10ヶ町の人々が祭りの大ファンである。

どの町内にも強烈な「ヤマキチ」がいて、他の町内にも口を出す。とにかく、大垣祭をめぐる人々にとって、物理的にも心理的にもヤマは巨大な存在である。

再建により70年ぶりに13両のヤマがそろった平成24年(2012)の大垣祭は、一般の関心も高く、新聞各社が一樣に報じた。ある記者は再建ヤマの町内に取材した印象を「自分の町のヤマを曳く誇りと喜びが伝わる」とし、「ヤマが子どもからお年寄りまで異なる世代をつなぎ、ひいては地域の絆を結んでくれる」というコメントを引いている(小田, 2012)。

再建ヤマで連想するのは、昭和30年代(1955-64)、全国で、戦災で失われた天守閣の復元ブームである。このとき、空襲で炎に包まれる天守閣を見て、「自分の家が焼かれるよりも傷つき、「無力感に包まれた」人々が「自分たちの郷土のシンボルを建て直そうと天守閣の復元に取り組んだ」。平成になってから、当時の工法による、より「本物」志向の復元が盛んであるのも、「昭和の再建で、目に見える天守ができたからこそ」(朝日新聞2013年10月7日⁹⁾)である。それは、焼失ヤマの町内も10ヶ町の一員として大垣祭を支えてきたことや、何より数年置きに三輛ヤマを奉曳してきた祭礼の歴史が、ヤマの知識の継承と再建への気運醸成に資したと軌を一にしている。

かつて祭り不参加を断行した魚屋町の鯉ヤマは、大垣空襲では炎上するヤマ蔵から曳き出され、辛くも焼失を免れた。それを報じた当時の記事について追加取材した記者は、「山車の存在が町を一つにするんや」と町内の人に語らせている(井上俊輔, 2013)。この言葉は、まさに大垣祭の「こころ」を要約している。

「ヤマは一遍につくりあげるものではない、だんだん良くしていく」、「文化財になるより、自分たちの思い描くヤマをつくりたい」。聞き取りで拾った町内の人の声である。文化財に指定して、文化都市の顔にしたい。そうすれば、補助金率が上がって、町内の負担も減るではないか。ヤマ整備を牽引する市は、町内の利益を慮って指定を視野に調査を進めている。傍からは、行政側の思惑と町内の気持ち、一致するようで、すれ違いも見えて、もどかしい。部外者は大垣祭の盛行を祈るばかりである。

とまれ、10ヶ町の人々の「うちのヤマが一番」という誇りがよい意味で競争心を煽り、「ヤマは進化するもの」「いつ完成ということはない」という向上心が、よりよいヤマを目指し、理想のヤマの途上にある現在のヤマの求心力が、町内の一致団結を生んできたように思うのである。

謝 辞

本稿は、本町・宮町・岐阜町・船町・伝馬町の方々からの聞き書きをもとに作成したが、誤謬は筆者によるものです。祭礼の取材には前記町内をはじめ多くの方々にご助力を賜りました。関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。また、調査の機会を与えていただいた長谷川嘉和先生、諸々の便宜をお図りくださった大垣市教育委員会に感謝申し上げます。

注

¹ 祭礼に際し、神賑のために曳き回される風流・鉦・万灯・梵天・山・山笠・山車・曳山・船・車・屋台・だんじりなどさまざまに呼称される(宮田登・植木行宣, 1999)が、ここでは一般的に「曳山」と呼ぶ。

大垣祭の曳山は独特の漢字([車]偏に[山])で表記される。これは西濃地域独特の「地域漢字」(笹原宏之, 2006, 2007)であり、通常ソフトでは表示できないので、ここでは文・表中とも一般的な曳山を「山」、大垣祭のものは「ヤマ」と表記する。以下も参照。

菅井保宏, 2010年, 「車山」が1文字に(前編・中編・後編)(ことばマガジン 漢字紀行)

<http://kotoba.asahi.com/moji/2010061400007.html>

<http://kotoba.asahi.com/moji/2010062900001.html>

<http://kotoba.asahi.com/moji/2010071100003.html> (いずれも2014年1月5日閲覧)

² 三大曳山祭(京都・祇園祭, 埼玉・秩父夜祭), 三大山車祭(祇園祭, 滋賀・長浜曳山祭)とも。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E5%B1%B1%E7%A5%AD> (2013年12月29日閲覧)および(宮田登・植木行宣, 1999)を参照。

³ 表1は現行祭礼のみ。吉野誠(2006)によると、県内の現存曳山は約65ヶ所150両。

⁴ 江戸時代の曳山巡行順に従った表記。現在でも、10ヶ町を列記するときはこの順番でされる。ただし、恵比須ヤマの当番のみ、もと同一町内であった伝馬町と岐阜町が連続するのを避けて順番が入れ替わっている。

⁵ 文化庁「地域伝統文化総合活性化事業」(2010年, 2011年から「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」に集約)の採択を受けて実施された大垣市伝統芸能伝承保存事業の一環(他に映像記録など)。平成22~25年(2010-13)実施。初年度の事業主体は大垣市教育委員会、平成23年度から大垣市文化遺産活用推進事業実行委員会、民俗芸能・都市祭礼・囃子・金工・郷土史・染色・民俗・カラクリ人形・山車の各専門家からなる大垣祭記録保存委員会(事務局は大垣市教育委員会)と調査員から構成され、大垣祭を調査・記録し、歴史的評価や意義をとりまとめ、今後の保存伝承の基礎資料とすることが目的。(大垣市教育委員会, 2011年, 大垣祭総合調査実施要領)

なお、同じく文化庁事業として大垣市文化事業団の伝統文化コーディネーター養成講座が採択されている(中井正幸, 2013)。

⁶ 大垣市教育委員会による総合調査では歴史・山車・カラクリ・囃子など各分野の専門家が調査に当たり、現在、報告書を執筆・編集中心である。上記各項目について詳細はその報告書に譲り、ここでは現行祭礼の記録に重点を置く。

⁷ 「しんがく」とも。古い方で、若い世代は「しがく」という人が多い。

⁸ 山車の助数詞には台・本・輦などがあるが、ここでは大垣祭で一般的に用いられる「両」を使用する。

⁹ 宵宮(例祭前夜祭)ではなく、試楽・本楽両日ともに夜間実施される行事をいう。

¹⁰ 大半の町内は、自治会組織と祭礼組織(後述)を分離している。ただし、両組織にまたがって役が兼務されることも多い。

¹¹ 祭礼では、出ヤマ運営委員会から配布された、目立たない、小さなピンク色のリボンをつけている。各町内の担務員数はつぎの

とおり。船町 (51)・伝馬町 (47)・岐阜町 (21)・宮町 (41)・本町 (68)・中町 (47)・新町 (61)・魚屋町 (23)・竹島町 (42)・俵町 (75)。(大垣祭出ヤマ運営委員会, 2013)

12 船町など。

13 相生ヤマ (本町)・浦嶋ヤマ (中町)・菅原ヤマ (新町)・鯉ヤマ (魚屋町)・榊ヤマ (竹島町)・布袋ヤマ (俵町)・玉の井ヤマ (船町)・松竹ヤマ (伝馬町)・愛宕ヤマ (岐阜町)・猩々ヤマ (宮町)

14 藩主が領民慰撫のため山車を下賜したという伝承は富山県高岡市などにもみられる。高岡では下賜された山車という権威づけによって領主との深い関係性を政治・経済的地位として誇示する高岡商人と周辺町民との曳山紛争が知られる (田中喜男, 1990)。大垣においても三輛ヤマは本ヤマよりも権威が高いものとみなされている。

15 神楽ヤマ・大黒ヤマ・恵比須ヤマ。

16 神楽ヤマは本町・中町・新町, 大黒ヤマは魚屋町・竹島町・俵町, 恵比須ヤマは船町・伝馬町・宮町・岐阜町の各町内が交代で曳行する。なお, 江戸時代には, 岐阜町は伝馬町北町と称した伝馬町の枝町で, 伝馬町の一部とみなされていた。明治元年 (1868) に分離 (平凡社地方資料センター, 1989; 「角川日本地名大辞典」編纂委員会, 1980), 祭礼への単独参加資格を得ている。

17 古くは「芸妓の歌舞伎」(岐阜タイムス 1953年5月11日) や子ども歌舞伎を演じていたものか。加納喜長 (2012) によると, 船町・玉の井ヤマでは, 明治元年 (1868) まで男児のみの歌舞伎だったのが, それ以降女児ばかりの出演が太平洋戦争開戦まで続いたという。同書では「稚児芝居」と表記。

18 コースは, 八幡神社, 大垣城内の常葉神社, 市役所, 10ヶ町の各氏神を結ぶ。

19 本楽朝に張り, 御輿が通ったら外すものだとされている。

20 現在, 曳行の負担が大きいと, 世帯数の少ない魚屋町 (大黒ヤマ) は先触れを行っていない。また, 同じく担務員の少ない岐阜町 (恵比須ヤマ) は1日のみの曳行で, 範囲も他町内には比べ小規模であった。

21 大垣八幡神社 HP <http://ogaki80003.or.jp/> (2014年1月5日閲覧)

22 現行では八幡大橋・龍の口橋を渡り, 鳥居前で奉芸する。

23 現在, これは市役所での掛芸にとっかわられている。市役所玄関には市章入りの青い門幕が張られ, 奉納芸能鑑賞のための観覧席テントが立つ。

24 「かえし」と発音される。「おかいし」とも。

25 現在のものは, 昭和37年 (1962) に無事塗り替えられている。

26 「恵比須さんの合羽」と呼んでいるが, 実際は人形もろともヤマ全体を包むテント状の覆いである。

27 辻村良吉, 小さいころの一番の楽しみ (中日新聞 1979年3月30日)

28 聞き取りによる。

29 委員長は実権を伴わず, 実質的な最高責任者は10ヶ町から選任される委員長代理。三輛ヤマを輪番で奉曳する各町内からなる神楽会・恵比須会・大黒会から1人ずつ選出し, その3人から委員長代理1人と副会長2人を選任する。

30 平成25年 (2013) 大垣まつり実行委員会 (後述) ができる以前は「主催」していた。

31 明確に定義されているわけではないが, 市HP, 要項, 記者発表資料などを見る限り, 「大垣まつり」とは祭礼に便乗して行われる観光イベント等も含めた「事業」全体を指すようである。ヤマの巡行は「大垣まつり出ヤマ事業」と表記される。ここでは, 民俗事例としての祭礼 (ただし, 本来祭礼の中心行事であるべきだが, 現在では, 10ヶ町が関与しない神事と神輿渡御については殆ど触れていない) をいうときは「大垣祭」, その他イベントも含めた事業全体をいうときは「大垣まつり」と区別して表記する。

32 実務はこの課で行われるため, 商工観光課長は祭礼中ほとんど出ずっぱりである。ヤマ曳行に支障のある巡行路の街路樹剪定・道路の補修・電線の垂れ下がり処理依頼, ヤマの現在地を確認す

るGPSの管理 (2011年～), 夜宮の雑踏警備 (後述) の指揮, 観光パンフレット用写真の撮影, トイレ・案内所の設置など, 町内行事やヤマ巡行以外の祭礼に関わるあらゆる案件を差配している。

33 祭礼に伴う交通規制や防犯のため警察の関与は必要不可欠である。

34 「ヤマ道」という。曳行に支障がないように電線の高さなどが規制されている。

35 雑踏警備とは, 夜宮の際, ヤマから観衆を遠ざけ, 事故を防ぐこと。奉芸の後, 多くの町内はヤマを回転させる。重量のあるヤマの回転が高速かつ複数回に及ぶと, コントロールできなくなることもある。群衆にヤマが突っ込んだり, 近づきすぎた見物客が巻き込まれたりしないように, 民間警備会社のガードマンとともに, ヤマを取り囲む観衆を押しとどめるのである。

36 初寄と反省会は, それぞれ3月と5月, 祭礼の前と後に行われる会合である。委員会から10ヶ町にヤマを出してもらえるのか, 申し合わせ事項に違反不備がなかったかを確認する。

37 10ヶ町が関与しない八幡神社例大祭 (神事), 神輿渡御のほか, ポスター展, 案内所・警備本部など

38 担務員の中には町内在住だけではなく, 転出した人や住民の縁者なども含まれる。

39 4年に一度, 恵比須ヤマ当番年に組織される。この委員長と青年部長が中心になって恵比須ヤマを奉曳する。前代委員長がサポートすることが多い。

40 三輛ヤマを輪番で奉曳する3~4ヶ町。

41 後述する魚屋町の祭礼不参加 (1976) をきっかけに発足 (伝馬町で聞き取り)。世代間 (若年層はヤマの運営に関わることができない)・町内どうしのギャップを埋めるため結成 (船町で聞き取り)。10ヶ町を横断する若い世代の集まりが持たれるようになって, 各町内間が親密になり, 現在, その世代が祭礼を仕切るようになってきたため, 以前より諍いが少なくなったという (宮町で聞き取り)。

42 本町では町外の棒頭らも育成会の準会員。

43 ぼうがしら。「ぼうがし」とも。

44 棒頭8人のうち10ヶ町以外の大垣市内5人, 養老町・垂井町・輪之内町各1人 (大垣祭出ヤマ運営委員会, 2013)

45 神社への参拝の仕方など。

46 子どもたちの舞踊を出す船町では祭りの8か月前から週1回の稽古に通う。

47 伝馬町は毎月第3日曜日, 岐阜町は第2日曜日, 宮町は9・19・29日に実施。

48 船町は4月末まで毎週月水金曜日。伝馬町では2月末~3月, 子どもたちが毎週月火水に練習する。

49 子どもへの練習には保護者の送迎が不可欠。学校や子供会にも事前に協力依頼しており, 調査時, 子供会会長 (非担務員) は稽古はじめにも参加した (2011)。

50 平成7年 (1995), 船町は恵比須ヤマを分解・組み立てている。(大垣市教育委員会, 1995) 参照。

51 伝馬町のヤマ蔵は奥行がやや足りないため, 恵比須ヤマの手占棒のみはずして格納する。

52 岐阜町では夜宮の直前に神社前で提灯を枠に固定した。これは古いやり方で, 前もって準備する方法は後に改良された簡便法のような。現在はこちらが主流である。岐阜町や船町は震災でヤマを失うことがなかったため, 伝承も古い方法をよく残している。

本町はヤマ蔵ではやばやと提灯つけをした (提灯枠をヤマにセットした) ので, 「本町さんだけです」と批判されてしまった (2011)。

53 宮町に「恵比須ヤマ ヤマのかざり方 1999.5.4」とする覚書があり, [大垣市教育委員会, 1995] では, 船町が人形の組み立て・着付けを行っている。

54 運営委員会では祝儀辞退が決議されたが, 例年どおり祝儀を用意してヤマを待っている人があり, また, ヤマの運営 (本町は再建=塗や金具の追加中だったのでとくに) に祝儀が不可欠なため, 全く祝儀集めを行わないわけにはいかなかった。

55 祝儀集めは三輛ヤマだけのしきたりだからというのが理由。

56 宮町は興文小学校で掛芸 (2011)。この年は, 通りがかった丸の内保育園にも飛び入りで訪問した。

船町は西小学校と興文小学校で掛芸後, ゆりかご幼稚園で園児と記念撮影を行った (2013)。

57 先触れが半休になるのは三輛ヤマ組合町の当番町だけなので、とくに嬉しかった、誇らしかったという思い出をよく聞いた。子ども心にヤマへの愛着と矜持を育まれたようだ。

ちなみに試楽・本楽のときも、以前は学校が休みになった。

58 火の回りが早くないという理由で木綿が使われる。夜宮用の幕がゆっくり燃えている間に、高価な見送り幕を外すことができるからである。

59 岐阜町・愛宕ヤマ、船町・玉の井ヤマは回転させない。船町の某氏がヤマを回したときは、「何かあったら（ヤマを破損させたら）家を売るから」と予め幹部に断りを入れたという。それほどヤマは高価で、ヤマの回転は危険を伴う。

60 燃える提灯を叩き落とす役目の子どもがヤマに乗っていた。

61 市内 11 団体が加盟。

<http://www.ogaki-tv.ne.jp/~tudoio-ogaki/pg22.html> (2014 年 1 月 9 日閲覧)

62 奉芸・掛芸の所要時間はおおむね 7 分とされるが、芸ヤマ（船町・玉の井ヤマ、伝馬町・松竹ヤマ）はたびたび時間超過するので、その直後につくことは忌避される傾向にある。時間調整のために次のヤマが短縮を要請されることがあるからである。この 2 両は趣向が似ているので、順番が近接しないように調整している。

また、志比須ヤマの当年・次年の当番町は本楽夜宮後にお頭渡しがあって、最後に残らねばならないので早い到着を避ける。

63 「拝礼＝一旦停止」と申合せで決められているが、町内や棒頭によっては手古棒を神社の方向へ振ったり、前の手古棒を押し下げ、後ろの手古棒を押し上げてヤマに拝礼させたりするところがある。そうすると時間が長くかかってしまう。そもそも巡行の時間短縮のための規則であり、こうした行為が後の反省会で他町から指摘されることになる。

64 岐阜町は「弓八幡」。

65 「お手を拝借、しゃんしゃん」「おしゃしゃのしゃん」（宮町）。

66 担務員長や自治会長、その経験者など。

67 元日は行わず、大晦日に実施。

68 お頭を預かった年内に 1 回、5 月の祭りまでに 1 回（宮町）、10～11 月に 1 回、2 月頃に 1 回（伝馬町）とも。

69 「お手を拝借、しゃんしゃんしゃん、おしゃしゃのしゃん」。

70 http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%8C%E8%97%A4%E5%A4%A7%E7%A7%80#cite_note-1 (2014 年 1 月 9 日閲覧)

71 漆を塗るまで材の乾燥に 8 年かかるといわれていたが、資金確保のため、実際にはそれ以上の歳月がかかった。

72 名古屋の若手仏具職人らの技術向上・伝統技術への関心喚起を目的に平成 12 年（2000）結成。木地・彫刻・漆塗り・箆押し・彩色・鍍金具の職人が在籍する。<http://meibutuken.p-kit.com/> (2014 年 1 月 9 日閲覧)

73 実際の復曲・作曲は「祭り囃子御洒落」が行ったものと思われる（黒谷正人、2013）。

74 岐阜町での聞き取りによると、滋賀県長浜市や京都市まで、個人的に囃子を習いに行く人があったという。こういう人は、町内のひとから「認められた」人であって、そういう人でないと能管や小鼓は演奏させてもらえなかった。

75 神楽ヤマの操り人形 7 分 30 秒が所要時間の基本になっている。

76 中里亮平（2010）は祭礼は「基本的性質から変わり続けるもの」で、それを「変化、変容、変遷」として考察されてきたが、祭礼参加者の主体的な意思による変化を重視し、「変更」という言葉を選択している。

77 芦田徹郎（2001）は「イベント的祭り」、茂木栄（1989）は「イベントまつり」と名付けて考察している。

78 現在でも、船町や岐阜町は、建築会社に手古の手配を依頼している。

ところで、同記事では「練り歩く順序や山車の回し方は、すべて手古顔（てこがしら）が指揮する」とし、現行との相違がある。すなわち、現行では順路は幹事等町内役員が決定し、「手古顔」という役名はなく、手古の総責任者は棒頭もしくは一番棒である。

79 この組織は未詳。

80 魚屋町祭礼不参加問題を契機に結成された青年部のことか。

81 全員、日本語が堪能なので、掛け声も日本語であるため、見た目は他の手古と区別がつかない。外見上は違和感がなかったと思われる。

82 伝統工芸美術保護条例（1979）による中国の国家資格。他に、省工芸美術大師、省工芸美術名人、市工芸美術大師、工芸美術技

芸職人がある。維基百科 <http://zh.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E5%B7%A5%E8%89%BA%E7%BE%8E%6%9C%AF%E5%A4%A7%E5%B8%88> (2014 年 1 月 6 日閲覧)

83 本町の紹介により、ヤマを再建した中町の囃子にも関与している。

84 船町で和装が負担になる若い人や高齢者、子どもたちのために作り始めた。いわば略装であるが、便利なので他町にも広がっている。

85 三輛ヤマの当番が回ってくるたびに新しく作られていたが、現在では前回作成したものを着用することが多い。船町ではデザインの大幅な変更をなくし、違和感なく毎回使用できるように配慮している。

86 大垣地域ポータルサイト西美濃「西美濃 初夏のお祭り 2013」<http://www.nisimino.com/nisimino/tokusyuu/ogakimaturi/index2.shtml> (2014 年 1 月 3 日閲覧)

87 「祭屋台の下で 高山祭守の人々：2 復活の音色 お囃子指導広がる輪」（朝日新聞 2003 年 10 月 6 日）

88 昭和 25 年頃に他に先駆けて豆電球による電飾を取り入れている。

89 川村清志（2009）は『日本民俗学』236 号（2003 年）のフォークロリズム特集を取り上げ、2000 年頃、学会でブームの様相を呈したフォークロリズムについて概括している。

90 このことに関して、芦田徹郎（2001）は熊本県の文化政策について分析している。

91 なお、宇野功一（2005）が神輿と山車巡行の分離について詳述している。

92 「昭和史再訪：天守閣復元ブーム」<http://digital.asahi.com/articles/TKY201310050221.html> (2014 年 1 月 6 日閲覧)

文 献

「角川日本地名大辞典」編纂委員会、1980、角川日本地名大辞典 21、角川書店、岐阜県。

芦田徹郎、2001、祭りと宗教の現代社会学。世界思想社。

井上俊輔、2013、あの記事から 68 年 戦争を生きた人

②「焦土に自慢の山車」、中日新聞朝刊、8 月 14 日。

宇野功一、2005、近代都市祭礼における神輿巡行と山車巡行の分離過程。国立歴史民俗博物館研究報告 124。

加納喜長、2012、船町覚書。手稿コピー。

岩本通弥、2003、方法としての記憶 民俗学におけるその位相と可能性。著：岩本通弥、現代民俗誌の地平 3 記憶。朝倉書店。

吉野 誠、2006、曳ヤマに魅せられて。私家版。

宮田 登・植木行宣、1999、変容する都市祭礼の文化財的側面に関する総合的研究。文部省科学研究費補助金研究成果報告書。

金 賢貞、2006、都市祭礼におけるヨソモノの存在とその意義 茨城県石岡市常陸国總社宮大祭を事例に。日本民俗学 246。

原 知章、2000、民俗文化の現在 沖縄・与那国島の「民俗」へのまなざし。同成社。

黒谷正人、2013、文化ぶんぶん人類学 山車祭り囃子を復元。中日新聞朝刊、9 月 19 日。

- 笹原宏之, 2006, 日本の漢字. 岩波書店.
- 笹原宏之, 2007, 国字の位相と展開. 三省堂.
- 山田美春, 1976, 素描山車の伝説. 岐阜日日新聞, 7月22日.
- 小田香緒里, 2012, 記者ノート 世代や地域をつなぐヤマ. 岐阜新聞朝刊, 5月3日.
- 松平 誠, 1978, 都市の社会集団 「まつり」を準拠点とする実証研究その一. 応用社会学研究 19号.
- 森田真也, 2003, フォークロリズムとツーリズム 民俗学における観光研究. 日本民俗学 236.
- 清水 純, 2012, 神田祭 担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係. 日本民俗学 271.
- 西宮神社講務課, 2006, えびすたより 2. 西宮神社.
- 西宮神社事業課広報, 2006, 西宮えびす 26. 西宮神社.
- 青山松任, 1934, 大垣まつり.
- 川村清志, 2009, 都市民俗学からフォークロリズムへ その共通点と切断面. 著: 小池淳一, 〈歴博フォーラム〉民俗学的想像力. せりか書房.
- 川嶋将生, 2010, 祇園祭 祝祭の京都. 吉川弘文館.
- 浅野準一郎, 2011, 語り継ごう 大垣祭. 大垣市文化財保護協会.
- 大垣祭出ヤマ運営委員会, 2013, 平成 25 年大垣まつり 大垣祭ヤマ道順路及び申合せ. 大垣祭出ヤマ運営委員会: 2013.
- 大垣市教育委員会, 1995, 大垣市文化財調査報告書第 26 大垣祭ヤマ調査報告書 大垣の祭ヤマ. 大垣市教育委員会.
- 大垣市役所, 1930, 大垣市史 中巻. 大垣市役所.
- 中井正幸, 2013, 大垣祭記録調査事始. 著: 浅野準一郎, 大垣まつり 語り継ぎたい郷土の遺産. 風媒社.
- 中村孚美, 1971, 町と祭り 秋田県角館町の飾山囃子の場合. 日本民俗学 77.
- 中里亮平, 2010, 変更からみる祭礼の現代的状況 東京都府中市大国魂神社くらやみ祭の事例から. 日本民俗学 261.
- 田中喜男, 1990, 越中高岡町と周辺在郷町の曳山紛争. 著: 地方史研究協議会, 都市周辺の地方史. 雄山閣出版.
- 筒井 裕, 2009, 「曳きものの祭礼」にみる地域的特性とその形成要因 埼玉県を事例として. 國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要 1.
- 筒井 裕, 2010, 「曳きものの祭礼」の地域的特性と装飾の変化 兵庫県を事例として. 國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要 2.
- 八木康幸, 1998, 祭りと踊りの地域文化 地方博覧会とフォークロリズム. 著: 宮田登, 現代民俗学の視点 3 民俗の思想. 朝倉書店.
- 安田里美, 2000, 見世物稼業 安田里美一代記. 新宿書房.
- 平凡社地方資料センター, 1989, 日本歴史地名大系 21 巻 岐阜県の地名. 平凡社.
- 北村 敏, 1989, 東京近郊の神社と祭り 調布市を事例として. 著: 岩本通弥・倉石忠彦・小林忠雄, 都市民俗学へのいざない I 混沌と生成. 雄山閣出版.
- 茂木 栄, 1989, 都市とイベント 新しいまつり形式の抬頭. 著: 岩本通弥・倉石忠彦・小林忠雄, 都市民俗学へのいざない II 情念と宇宙. 雄山閣出版.
- 和田唯男, 1968, 大垣祭りとヤマの研究. 美濃民俗 13.
- 和田唯男, 1975, 生きていた曳山行事のしきたり 大垣祭ノート. 美濃民俗 98.

表4 新聞記事一覧

新聞記事	掲載日	ページ	キャプション	掲載日	ページ	
名物大垣祭りも諸行事速感	朝日新聞	19440430	2	岐阜朝刊	19980512	20
黒王に自慢の山車 家は焼けてもどつと朝からか笑ひ	中部日本	19450805	岐阜	朝日朝刊	19980512	16
大垣祭り市当局も力こぶ	朝日朝刊	19460504	2	朝日朝刊	19981120	23
10 余年ぶりに「笈宮」復活 早くも山車の組立 続付けも始まる	岐阜朝刊	19530511	3	朝日朝刊	19990209	18
大垣まつりの由來 起りは300 年前に 祭の日は大名も通行止	毎日朝刊	19540514	6	岐阜朝刊	19990507	20
大垣市 大垣祭おはやしを審議委員会指定申請	岐阜夕刊	19560422	3	岐阜朝刊	19990509	18
13 年ぶり大垣祭復活 大垣まつり 新しく三合作る	岐阜朝刊	19580215	5	朝日朝刊	19990522	22
恵比須台奉引き衣装 大垣城内で展示 岐阜の保存会が贈る	毎日朝刊	19641222	14	朝日朝刊	20000507	21
大垣祭りのかけの功労者今津さら実例の表彰	岐阜夕刊	19670512	3	朝日朝刊	20000514	21
大垣祭文化財 県文化財に16 件 大垣祭山車など	朝日朝刊	19710915		朝日朝刊	20000519	26
十五石大鼓 大垣まつり	毎日朝刊	19720810	16	岐阜朝刊	20010510	19
表彰 大垣まつり山車の保存育成功績者 3 人を表彰	毎日朝刊	19750515		岐阜朝刊	20010516	24
大垣まつり 曳ヤマ巡回ピンチ 経費難と人手不足 三百年の伝統も縮小か	岐阜朝刊	19760808	13	朝日朝刊	20010520	22
大垣まつり 曳ヤマに危機 近代化で会員分裂 9 台勢をろいは不可能に	朝日朝刊	19760508		岐阜朝刊	20020512	22
三百年間の伝統断り… 住民がひき回し 大垣まつりの燐やマ	岐阜朝刊	19760509	11	岐阜朝刊	20030511	25
曳ヤマとピンチに保険かける 大垣まつり 不慮の事故に備えて	毎日朝刊	19760509	16	岐阜朝刊	20040410	16
大垣まつり定ぶようから 本番 “曳ヤマ”も準備 OK 初めて住民がひき回し	岐阜朝刊	19760515		岐阜朝刊	20040509	25
華麗な8 台のやま 巧み “掛け芸”を披露 大垣まつり始まる	朝日朝刊	19760515		岐阜朝刊	20050507	22
8 面の“曳ヤマ” 街飾る 自身に住民がひき回す ムードある “お祭りキアラハン”	岐阜朝刊	19760711	9	朝日朝刊	20050512	24
ふるさとの祭り 戦勝式 大垣まつり松竹やまの『風送里』	朝日朝刊	19760803		岐阜朝刊	20050512	24
文化五年の作と判別 大垣まつり松竹やまの『風送里』	毎日朝刊	19760807		岐阜朝刊	20050515	18
168 年前に作られた大垣祭・松竹やまの下巻	岐阜朝刊	19760827	13	岐阜朝刊	20060429	21
大垣市 大垣まつり「松竹やま」の下巻 168 年前	朝日朝刊	19770515		岐阜朝刊	20060514	24
朝鮮山車の速話紹介 小冊子「山車と竹島町」配る きょうから大垣まつり	朝日朝刊	19770515		岐阜朝刊	20070209	20
新説あり 大垣まつり開幕	朝日朝刊	19770515		岐阜朝刊	20070320	3
新説あり “掛け芸” 大垣まつり試染祭 にぎわう700 の商店	朝日朝刊	19770515		岐阜朝刊	20070504	13
豪華なやまが “掛け芸” 大垣まつり試染祭 にぎわう700 の商店	毎日朝刊	19790330	西濃 16	岐阜朝刊	20070513	22
大垣城とともに 再建 20 周年記念 16 大垣まつり 観覧から山車もらう	岐阜夕刊	19790330	6	岐阜朝刊	20071215	22
ぎふの文化財 大垣まつりのヤマ 大垣市	岐阜夕刊	19790702	4	岐阜朝刊	20080502	22
ぎふの文化財 大垣祭・恵比須ヤマ 大垣市	岐阜夕刊	19790704	4	岐阜朝刊	20080511	24
ぎふの文化財 大垣祭・櫛ヤマ 大垣市	岐阜夕刊	19790709	6	岐阜朝刊	20090422	24
ぎふの文化財 大垣祭・朝鮮山車遺品 大垣市	岐阜夕刊	19790710	4	岐阜朝刊	20090510	18
大垣まつりの山車 絵巻物に	朝日朝刊	19800425	16	岐阜朝刊	20090713	20
大垣まつり山車絵巻	朝日朝刊	19800425	16	岐阜朝刊	20100420	18
駅前通りにも曳ヤマ姿 要望にこたえ復活 歩行者天国に繰り出す七高	岐阜朝刊	19830424	西濃 14	岐阜朝刊	20100509	17
ふたひねり懸る曳ヤマの四季 15 大垣祭り	岐阜朝刊	19830513	20	岐阜朝刊	20101006	24
春の大垣まつり 山車の統一巡行 9 年ぶり復活 魚屋町も仲間復帰	毎日朝刊	19840310		岐阜朝刊	20101016	19
大垣市観光協会『大垣祭絵巻』	朝日朝刊	19860824	14	岐阜朝刊	2010416	23
大垣市 大垣まつりにちなみ玩具 懐かしい	朝日朝刊	19870429	16	岐阜朝刊	2010513	21
大垣祭、大きな威嚇か 細玉まねに人手不足の波 曳き回しコース短縮の声も	毎日朝刊	19900512	19	岐阜朝刊	2010624	16
大垣市 大垣まつりにちなみ玩具 懐かしい	読売朝刊	19920508	22	岐阜朝刊	2010824	18
「神楽ヤマ」の高欄部分 43 年ぶり修復 14 日	朝日朝刊	19930409	22	岐阜朝刊	20110523	20
大垣祭、大垣まつりにちなみ玩具 懐かしい	朝日朝刊	19930531	14	岐阜朝刊	2011223	20
大垣地城伝統芸能披露会 大垣祭りの日程を	朝日朝刊	19930724	18	岐阜朝刊	20120302	18
伝統が活性化か 「大垣まつり」日程で市民アンケート 土・日に変更 [54%]	朝日朝刊	19931014	20	岐阜朝刊	20120309	18
県委員文化財の大町官人衣装を修復 大垣	読売朝刊	19940308	21	岐阜朝刊	20120321	25
大垣市 大垣祭のヤマを彫刻で再現し香燭	朝日朝刊	19940416	20	岐阜朝刊	20120325	15
大垣まつり「相生ヤマ」を再建へ 半世紀ぶり、2 年後登場 からくり人形も再現	朝日朝刊	19940512	19	岐阜朝刊	20120410	31
県重要民俗文化財大町官人形衣装を修復 大垣祭ヤマ新舞山車の付属品	岐阜朝刊	19940603		岐阜朝刊	20120502	22
50 年ぶりの舞に拍手喝采 “大垣まつり相生ヤマ”からくり人形 3 年かけ復元	岐阜朝刊	19950911	22	岐阜朝刊	20120512	1
大垣市 大垣祭に白木の神輿完成	読売朝刊	19951007	26	岐阜朝刊	20120513	15
空襲で焼失、大垣まつりの「相生ヤマ」51 年ぶり復元	朝日朝刊	19960012	24	岐阜朝刊	20120513	1
戦中焼失の山車 華麗な姿を復元 来月「大垣まつり」で巡行	朝日朝刊	19960012	24	岐阜朝刊	20120513	1
大垣まつり華麗に開幕 51 年ぶり「相生ヤマ」曳き回し	岐阜夕刊	19960511	7	岐阜朝刊	20120514	13
大垣まつりに51 年ぶりに相生やまも曳き回し	読売朝刊	19970509	31	岐阜朝刊	20120514	21
大垣祭 再建の相生やまも参加	朝日朝刊	19970510	22	岐阜朝刊	20120516	16
「大垣まつり」を前に市内各町区内でからくり会場を	朝日朝刊	19970512	23	岐阜朝刊	20120517	1
大垣まつりきょう開幕	朝日朝刊	19970512	23	岐阜朝刊	20120517	1
大垣祭り本業 10 台のヤマ(やま)勢ぞろい	朝日朝刊	19970512	23	岐阜朝刊	20120517	1
9 日からの大垣まつりを前に、からくり操作	朝日朝刊	19970512	23	岐阜朝刊	20120517	1
伝統受け継ぐ子どもたち 大垣まつり	朝日朝刊	19980507	18	岐阜朝刊	20120517	1
大垣まつり「開幕 スコーン」西美濃	朝日朝刊	19980509	21	岐阜朝刊	20120517	1
大垣市の「大垣まつり」が11 日本業を迎え、	朝日朝刊	19980511	24	岐阜朝刊	20120517	1

※「岐阜」は岐阜新聞、前身の岐阜タイムス・岐阜日日新聞を含む
 ※大垣祭の開催を報じる記事(とくに最近分)は除いた

表 5 大垣祭年表

西暦	和暦	社会状況	祭礼関連	大垣祭	恵比須ヤマ	相生ヤマ
1547	天文16			斎藤道三大垣城攻めで八幡神社焼失		
1648	慶安1			戸田氏鉄が八幡神社再建		
1679	延宝7			戸田氏西が三輛ヤマを下賜		
1751	宝暦1			10ヶ町がヤマを改め、巡行順が定められる		
1868	慶応4	神仏分離令		これ以降、竹島町・朝鮮ヤマが廃され神ヤマに更新される		
	明治1			三輛ヤマのみ曳行		
1869	明治2			曳山巡行なし		
1872	明治5			巡行先頭(番町)が交代制になる		
1873	明治6			太陽暦採用で祭礼日が4月から5月に変更される		
1887	明治20					中町吉岡座の出火で類焼、幕・人形は無事
1891	明治24	濃尾震災		震災で神楽・布袋・船ヤマ(新町)が焼失、鯉・松竹・狸ヤマが破損		
1892	明治25			ヤマ巡行なし		このころ幕を新調
1893	明治26			ヤマ巡行なし		
1895	明治28			水害のため8月に挙行		
1896	明治29			水害のため8月に挙行		
1897	明治30			三輛ヤマのみ曳行		
1901	明治34				新造(当番町は伝馬町)	
1902	明治35			10月 常葉神社再建を祝って曳山		
1913	大正2			明治天皇崩御のため曳山巡行なし		
1914	大正3			昭憲皇太后崩御のため曳山巡行なし		
1915	大正4			大正天皇即位奉祝のため11月曳山		桑名市で漆塗りと金具取り付け
1916	大正5			新町が焼失した船ヤマの代わりに菅原ヤマを新造、再び13台がそろう		
1919	大正8			戸田家より金千円で三輛ヤマを修理	修理(当番町は船町)	
1923	大正12				塗・金具・衣装を修理(当番町は船町)	
1924	大正13			この年から9月常葉神社例祭に三輛ヤマ曳行(～1938)		
1925	大正14					人形衣装・幕の房を新調
1927	昭和2				装束を新調(当番町は船町)	
1928	昭和3			昭和天皇即位奉祝のため11月曳山		
1930	昭和5			大垣市史		
1931	昭和6	満州事変				
1932	昭和7					後ヤマの提灯を張り替え
1934	昭和9			戸田公人城300年祭に合わせ4月に挙行、特別曳挿えあり		
1938	昭和13			日中戦争のためヤマ巡行なし		
1941	昭和16	アジア太平洋戦争開戦				
1942	昭和17	本土初空襲				
1943	昭和18			戦争のため諸行事を控え、神事のみ挙行(～1945)		
1944	昭和19				1月 船町より伝馬町へお頭渡し	
1945	昭和20	8月 終戦		戦中、岐阜町・愛宕ヤマの水引がヤマ蔵雨漏りのため腐食 7月 大垣空襲で神楽・大黒・相生・布袋・浦嶋・松竹・狸ヤマが焼失		焼失
1946	昭和21			本楽のみ挙行		
1950	昭和25			岐阜町・愛宕ヤマの水引を修理		
1952	昭和27			伝馬町・松竹ヤマを再建	修理(当番町は岐阜町)	
1953	昭和28		ぎふ信長まつり	夜宮が約10年ぶりに復活		
1955			名古屋まつり	大黒ヤマの頭が新調される		
1956		もはや戦後ではない(経済白書)	祇園祭に有料観覧席			
1958	昭和33			神輿3基を13年ぶりに新調		
1959	昭和34			大垣城再建		
昭和30年代半ば	青年団活動が停滞					
1962	昭和37	全国総合開発計画		宮町・狸ヤマの1/10模型を作成	お頭・水引幕を修理(当番町は伝馬町)	
1963	昭和38	観光基本法			宮町都合で当番を岐阜町に繰り上げ この年から「恵比須ヤマ記録簿」	
1964	昭和39	東京オリンピック			恵比須衣装を大垣市に寄贈	
昭和10年代			御輿新造ブーム			
1966	昭和41				修理(当番町は宮町)	
1967	昭和42			祭礼功労者を表彰	屋形を修理、鯛を塗り替え	
1968	昭和43			船町ヤマ囃子を市重要無形民俗文化財に指定 美濃民俗文化の会が調査・記録		
1969	昭和44			宮町・狸ヤマのカラクリ人形を復元、カラクリを市文化祭で披露(1970も)		
1970年代			このころから、高山祭などで囃子生演奏が録音に			
1970	昭和45	大阪万博		これ以降、海外公演などイベント増加	修理(当番町は宮町)	
1971	昭和46			大垣祭ヤマ(9台) 附朝鮮ヤマ附属品を県重要有形民俗文化財に指定		
1972	昭和47		NHK「ふるさとの歌祭」			
1973	昭和48	第1次オイルショック				
1970年代後半～80年代	高度経済成長		このころ伝統行事を再評価、祭りブーム			
1975	昭和50			宮町・狸ヤマのカラクリを八幡神社で披露		

西暦	和暦	社会状況	祭礼関連	大垣祭	恵比須ヤマ	相生ヤマ
1976	昭和51	ふるさと復興ブーム		曳ヤマ委員会で運営の近代化が議論になる 魚屋町が不参加 竹島町が手古不足のため町内で曳行 手古とヤマに保険をかける		
1977	昭和52			この年から当番町制度を廃止、出ヤマ運営委員会（魚屋町は不参加）制度に 魚屋町が単独行動 前触れに大黒ヤマ除く神楽ヤマ・恵比須ヤマ曳行、以後慣例に 竹島町・鱒ヤマのカラクリ人形に新機構を加える	修理（当番町は伝馬町）	
1978	昭和53		古川町・麒麟台のカラクリ人形を24年ぶりに新調 加茂郡白川町切井・佐長田神社屋台を新調、約60年ぶりに曳き回す			
1979	昭和54			愛宕ヤマ・朝鮮ヤマ付属品が県重要有形民俗文化財に指定		
1980	昭和55		日本神輿協会発足			
1981	昭和56					このころから自治会で再建運動
1983	昭和58			駅通り巡行が復活、本業夜宮前に神輿を担ぎだすように		
1984	昭和59			出ヤマ運営委員会に魚屋町が参加、巡行に復帰		
1985	昭和60					再建委員会で本格的に運動
1987	昭和57	第4次全国総合開発計画	このころイベント公演増加	このころ手古等の人手不足が顕著に		
1990	平成2	バブル経済崩壊		出ヤマ運営委員会で開催日の土日変更・巡行コース短縮が提案される	水引・前横幕を新調（当番町は伝馬町）	
1991	平成3			宮町集会所でできる、毎月稽古開始		本町相生ヤマ再建委員会
1992	平成4		おまつり法（地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定商工業の振興に関する法律）			
1993	平成5			4月 「大垣まつり曳ヤマ十ヶ町」が開催日変更を市に要望 8月 大垣曳ヤマ対策市民懇話会が開催日変更について市民アンケート実施		
1994	平成6			朝鮮ヤマ付属品を修復	車輪・台輪・軀体等修理	ヤマ再建開始（～1995） 12月 神戸町・滝協順一に制作依頼
1995	平成7	阪神淡路大震災		この年から開催日を15日までの直近日曜日に変更		9月 カラクリ人形（神主友成）完成
1996	平成8			宮町・狸ヤマのカラクリ人形と樋を制作		新造ヤマが大垣祭で曳行される 土台彫刻完成 5月 完成、53年ぶりの再建
1997	平成9					彫刻制作開始（～1998）
1998	平成10					カラクリ人形（尉、姥）完成
1999	平成11			宮町・狸ヤマの再建が始まる		5月 カラクリ人形（住吉明神）完成、全4体がそろそろ
2001	平成13			宮町・狸ヤマが完成		
2003	平成15					彫刻制作開始
2005	平成17					彫刻完成
2006	平成18					船町が十数年ぶりに西宮神社参拝、宮町も
2007	平成19		名古屋創作工芸らが愛知県岩倉市・岩倉山車夏祭りの雛子を制作	大垣祭の祭りヤマ行事を市重要無形民俗文化財に指定、市の助成金制度開始		
2010	平成22			大垣祭総合調査（～2013）、伝統文化コーディネーター養成講座（本町発表） 宮町・狸ヤマの漆塗りと金具の取り付け完成		
2011	平成23	3月 東日本大震災	震災により祭礼自粛ムード	1月 中町・俵町のヤマ再建と本町の塗・金具取り付けを市が補助 4月 岐阜町・愛宕ヤマの水引を新調、中国製 5月 市がヤマの位置情報をネット配信開始 5月 震災のため祝儀集めが自粛になる		ヤマ蔵を改修
2012	平成24			3月 市文化財報告会で大垣祭総合調査について発表（都市祭礼・ヤマ） 3月 俵町・浦嶋ヤマ、中町・布袋ヤマが完成 4月 奥の細道むすびの地記念館開館記念イベントで特別曳揃え 5月 新造の中町・布袋ヤマ、俵町・浦嶋ヤマが曳行される 7・8月 伝統文化コーディネーター養成講座（宮町・伝馬町発表）		特別曳揃えで新装ヤマを曳行
2013	平成25			3月 市文化財報告会で大垣祭総合調査について発表（カラクリ・民俗） 5月 神輿3基を加えた大垣まつり行列を実施		

※新聞記事のほか下記より作成

大垣市郷土館、2013年、大垣まつり 懐古展（展覧会リーフレット）

浅野準一郎、2013年、大垣まつり 語り継ぎたい郷土の遺産、風媒社

加納喜良、2012年、船町覚書（手稿コピー）

中野紀和、都市祭礼・小倉祇園太鼓をめぐる語り 獲得される「場所性」（岩本通弥、2003年、現代民俗誌の地平3 記憶、朝倉書店）

祝祭の100年研究会、祝祭の100年年表（日本生活学会、2000年、生活学第24冊 祝祭の一〇〇年、ドメス出版）

大垣市教育委員会、1995年、大垣市文化財調査報告書第26集 大垣祭ヤマ調査報告書 大垣の祭ヤマ、大垣市教育委員会

岩本通弥・倉石忠彦・小林忠雄、1989年、都市民俗学へのいざない J 混沌と生成・II 情念と宇宙、雄山閣出版

和田唯男、1975年、活きていた曳山行事のしきたり 大垣祭ノート（美濃民俗98号）

岐阜県、1971年、岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第2回、岐阜県図書館協会

大垣の文化財 <http://www.bunhogo-ogaki.jp/asset/index2.html#ken01>（2014年1月4日閲覧）

大垣市文化財報告会（2013、2012年）レジュメおよび口頭発表

大垣市地域文化コーディネーター養成講座（2012年）口頭発表